宇土城跡（西櫓台）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集

―本　文　編―

１９７７年

熊本県宇土市教育委員会

宇土城跡（西櫓台）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集

―本　文　編―

１９７７年

熊本県宇土市教育委員会

序

本報告書は、市立鶴城中学校の校舎移転先として決定した通称西岡台と呼ばれる独立丘陵上に位置する宇土城跡（西岡台）の発掘調査報告書であります。

調査は昭和49年３月２日から昭和51年３月25日までの長期間にわたり、その結果、古墳時代のＶ字溝、中世末の城郭が発見されました。このことは本市はもとより本県の歴史を考えていく上においても重要な遺跡であります。

このようなことから市では宇土城跡（西岡台）の重要性に鑑み、今後歴史公園として整備し保存していく所存であります。

なお本書が、今後、文化財の保護育成ならびに学術研究の一助ともなれば幸甚です。

最後に本遺跡の調査、および本書の刊行にあたりまして、調査委員の先生方をはじめ数多くの方々にご協力をいただきましたことに対し、深く謝意を表します。

昭和52年２月

熊本県宇土市長

大　和　忠　三

例　言

1．本書は市立鶴城中学校々舎移転に伴い、宇土市教育委員会が実施した宇土城跡（西岡台）の文化財調査報告書である。
2．調査は宇土市教育委員会が行い、別項の調査団を組織して行なった。
3．本書において城跡としていう場合、西岡台所在の城を、宇土城跡（西岡台）、小西築城の城を、宇土城跡（城山）として区別して呼称した。
4．調査の過程で小田富士雄（北九州市立歴史博物館）、小野忠凞（山口大学教授）、沢村仁（九州芸術工科大学教授）、白木原和美（熊本大学教授）、松本雅明（熊本大学教授）、三島　格（福岡市立歴史資料館々長）、森浩一（同志社大学教授）、各位の指導助言を受けた。記して謝意を表する。
5．調査地の実測、写真撮影と図面のトレースは主に平山修一、髙木恭二が行なった。
6．本書掲載の空中写真は陸上自衛隊西部方面総監部航空隊のご協力による。
7．本文で図中にあるレベルは、海抜標高を用いた。遺構中の記号でＳＡは柵、ＳＢは建物、ＳＤは溝、ＳＫは土坑、ＳＸはその他の遺構を示す。
8．原稿の執筆者名は題下に記したもののほかは文末括弧内に記した。遺物の整理・復原・実測は主として熊本県文化財収蔵庫の協力をえた。
9．印刷の期間は極めて短かかったが、印刷所秀巧社のご努力によって、すべての工程を円滑に終了することを得た。記して深く謝意を表する。
10．題字は宇土市長大和忠三の揮毫による。

調　査　団　の　組　織

調査責任者	熊本県宇土市教育委員会	
調査団長	原口　長之	熊本県文化財専門委員
調査員		
発掘調査	富樫卯三郎	日本考古学協会員・肥後考古学会長
	大田　幸博	熊本県立大津産業高校教諭
	平山　修一	宇土市教育委員会社会教育課主事
	髙木　恭二	宇土市教育委員会社会教育課主事補
文献調査	井上　　正	宇土市文化財専門委員
	阿蘇品保夫	熊本市立高等学校教諭
	卯野木盈二	熊本県立宇土高等学校教諭
調査協力者	澤山　収蔵	宇土市文化財専門委員
	平野三代喜	宇土市文化財専門委員
	坂田　邦洋	長崎大学医学部助手
	山崎　純男	福岡市教育委員会文化課
	髙木　正文	熊本県教育庁文化課
	丸山　武水	熊本県教育庁文化課
	松村　道博	熊本県教育庁文化課
調査補助員及び協力者	熊本県教育委員会文化課、宇土高校社会部、宇土高校社会部O．B、轟地区婦人会、轟地区住民	
調査担当課	宇土市教育委員会社会教育課	

目　　次

序　　章

Ⅰ　調査の経過

1　調査の動機 …… 1

Ⅱ　遺跡の環境

1　西岡台の位置と地形 …… 2

2　周辺の遺跡から見た西岡台 …… 4

3　宇土周辺の中世城跡について …… 24

文献調査

第一章

Ⅰ　予備調査

1　きき取り調査 …… 59

Ⅱ　発掘調査

1　千畳敷 …… 62

2　三城 …… 85

3　その他の地区 …… 99

第二章

Ⅰ　轟貝塚（西岡台地区）の調査 …… 105

第三章

Ⅰ　宇土城の歴史 …… 123

Ⅱ　肥後における名和氏と宇土氏 …… 135

Ⅲ　中世城跡としての西岡台 …… 151

Ⅳ　宇土城（小西城）調査報告 …… 158

第四章

Ⅰ　宇土氏・名和氏に関する神社・寺院 …… 173

終　　章

総　　括 …… 181

挿　図　目　次

序　章　Ⅱ　1

第１図　宇土城跡（西岡台）全図……折込み

序　章　Ⅱ　2

第１図　宇土半島基部における遺跡分布図…５

序　章　Ⅱ　3

第１図　宇土城とその支城の位置図……25
第２図　田平城位置図……27
第３図　縄張図……29
第４図　矢崎城位置図……32
第５図　縄張図……34
第６図　木原城位置図……39
第７図　縄張図……40
第８図　縄張図……42
第９図　阿高城縄張図……44
第10図　豊福城位置図……47
第11図　縄張図……48

第一章　Ⅱ　1

第１図　千畳敷遺構図……折込み
第２図　千畳敷ＳＤ０１・０２・０３土層断面図……64
第３図　千畳敷ＳＤ０１出土遺物実測図……67
第４図　千畳敷ＳＤ０１出土遺物実測図……68
第５図　千畳敷ＳＤ０１出土遺物実測図……69
第６図　千畳敷ＳＤ０２出土遺物実測図……71
第７図　千畳敷ＳＤ０２出土遺物実測図……72
第８図　千畳敷出土遺物実測図……75
第９図　千畳敷出土遺物実測図……76
第10図　千畳敷出土遺物実測図……77
第11図　千畳敷出土遺物実測図……78
第12図　千畳敷出土遺物実測図……79
第13図　千畳敷ＳＤ０２出土遺物実測図……80

第一章　Ⅱ　2

第１図　三城遺構実測図……折込み
第２図　ＳＢ０３実測図……86
第３図　ＳＢ０４実測図……86
第４図　ＳＢ０５実測図……87
第５図　ＳＢ０６実測図……88
第６図　ＳＢ０７実測図……88
第７図　ＳＡ０１・ＳＢ０８・ＳＤ１２・ＳＸ０１実測図……89
第８図　ＳＤ０９実測図……折込み
第９図　ＳＫ０４実測図……91
第10図　ＳＫ０５実測図……92
第11図　Ｊ地区遺構実測図……折込み
第12図　ＳＫ０８実測図……93
第13図　Ｆ地区遺構実測図……95
第14図　三城出土遺物実測図……96
第15図　三城出土遺物実測図……97
第16図　Ｃ地区遺構実測図……99

第二章　Ⅰ

第１図　周辺の縄文時代遺跡分布図…… 108
第２図　轟貝塚全図…… 109
第３図　轟貝塚（西岡台地区）地形測量図……折込み
第４図　轟貝塚（西岡台地区）出土土器実測図…… 114
第５図　轟貝塚（西岡台地区）出土土器実測図…… 115
第６図　轟貝塚（西岡台地区）出土土器実測図…… 116
第７図　轟貝塚（西岡台地区）出土土器実測図…… 117
第８図　轟貝塚（西岡台地区）出土土器実測図…… 118
第９図　轟貝塚（西岡台地区）出土土器実測図…… 119
第10図　轟貝塚（西岡台地区）出土鯨骨実測図…… 120
第11図　轟貝塚（西岡台地区）貝類構成・生息場所比率…… 121

第三章　Ⅲ

第１図　相良文書『八代日記』に現われた地名……折込み

第三章　Ⅳ

第１図　宇土城跡（小西城）地形図…… 162
第２図　宇土城跡（小西城）昭和46年試掘溝位置図…… 164
第３図　宇土城跡（小西城）昭和48年試掘溝位置図…… 165
第４図　宇土城（小西城）三の丸出土のキリシタン瓦らしい瓦（実測図）…… 170

表　目　次

序　章　Ⅱ　2

第１表　宇土半島基部における遺跡分布図地名表…… 6
第２表　宇土半島基部の前方後円墳群一覧表……15

序　章　Ⅱ　3

第１表　矢崎城古井戸一覧表……36

第一章　Ⅱ　1

第１表　千畳敷ＳＤ０１出土遺物一覧表……70

第2表　千畳敷ＳＤ０２出土遺物一覧表……73
第3表　千畳敷出土遺物一覧表……80
第一章　Ⅱ　2
第1表　三城出土遺物一覧表……96
第2表　三城出土遺物一覧表……98
第一章　Ⅱ　3
第3表　ＳＸ０２土師器分類表……101
第二章　Ⅰ
第1表　轟貝塚調査年譜……106
第2表　轟貝塚主要文献……106
第3表　石器一覧表……110
第4表　轟貝塚（西岡台地区）貝類目録…111
第5表　轟貝塚（西岡台地区）貝類構成比表……112

図　版　目　次

序　章　Ⅱ　3
1　田平城　城跡Ⅱ郭より田平の集落を望む……26
2　矢崎城　2号堀切りを県道より望む……33
3　木原城　六殿神社馬場小路より望む……38
4　阿高城　東阿高より望む……43
5　豊福城　主郭東側の内堀……47
第三章　Ⅲ
1　宇土城跡（西岡台）遠景　西側より…152
2　宇土城跡（西岡台）より城ノ越を望む……152
第三章　Ⅳ
1　宇土城跡（小西城）発掘された石垣基部……163
2　宇土城跡（小西城）より出土した大砲の一部……166
3　島原城天守閣に展示されている宇土城(小西城）出土の大砲と類似した大砲……167
4　同上　大砲の一部……167
5　宇土城（小西城）より出土した茶釜の破片……168
6　M・コロネリが1697年に銅版印刷した日本及び朝鮮地図の九州の部分……169
7　第4図瓦片（写真）……170
8　宇土城跡（小西城）の発掘で多量に出土する巴瓦……171
第四章　Ⅰ
1　西岡神社（宇土市神馬町馬場）……173
2　日吉神社（宇土市神合町神原）……173
3　極楽寺跡（宇土市神合町神原）……174
4　極楽寺本尊（宇土市神合町神原）……174
5　光園寺（宇土市神合町神山）……174
6　妙法寺（不知火町小曽部）……175
7　稲荷五社大明神社（宇土市本町五丁目）……175
8　天神社（宇土市伊無田町）……175
9　八王社（不知火町小曽部）……176
10　天神社（宇土市栗崎町）……176
11　八王社（不知火町長崎）……176
12　天満宮（宇土市野鶴町鶴見塚）……177
13　権現社（宇土市恵塚町恵里）……177
14　天満宮（宇土市網津町）……177
15　妙見宮（不知火町浦上）……178
16　小八幡宮（宇土市宮庄町）……178
17　天神社（宇土市恵塚町飯塚）……178
18　八幡宮（宇土市椿原町）……178
19　白山権現（宇土市神合町神山）……179
20　天満宮（宇土市長浜町）……179
21　宗福寺跡（宇土市椿原町）……179
22　名和行直の墓（宗福寺境内）……180
23　名和家の位牌（宗福寺）……180
24　椿原の椿（宗福寺境内）……180

1　宇土城跡（西岡台）空中写真
2　宇土城跡（西岡台）遠景（南側より）
3　千畳敷ＳＤ０１出土の古式土師器群
4　千畳敷西側ＳＤ０１・０２の重複状況
5　千畳敷ＳＤ０１・０２土層断面
6　千畳敷ＳＤ０２出土石塔群
7　千畳敷ＳＤ０２土層断面
8　千畳敷ＳＤ０２南西コーナー部
9　千畳敷ＳＤ０３
10　千畳敷ＳＫ０２出土人骨
11　千畳敷ＳＤ０３（南側より）
12　三城柱穴群（北側より）
13　三城柱穴検出状況
14　三城ＳＢ０３
15　三城ＳＢ０４
16　三城ＳＢ０８
17　三城ＳＤ０７
18　三城ＳＤ０７断面
19　三城ＳＤ０９
20　三城ＳＤ10・11
21　三城ＳＫ０５
22　三城ＳＤ１０内石臼出土状況
23　Ｃ地区ＳＢ１６
24　轟貝塚（西岡台地区）貝層断面

序　　章

Ⅰ 調 査 の 動 機

宇土市立鶴城中学校の老朽校舎改築のため、移転用地として当西岡台地を充てることに市関係機関で決定したのは、昭和49年1月のことであった。しかし同台地は「宇土城跡(西岡)」として市指定文化財にしていたため、用地買収の交渉と併行して記録保存調査を開始した。

調査が進むにつれ貴重な文化財であることがしだいに明白となり、昭和50年3月までに当台地は、縄文時代から近世までにわたる遺跡であることが判明した。

そこで宇土市としてもこの貴重な遺跡を守るため、中学校を当地に建設することを断念、同時に史跡公園として残すことに方針を変更した。

Ⅱ 遺 跡 の 環 境

1　西岡台の位置と地形

宇土半島　宇土半島は熊本県海岸地帯のほぼ中央に突出して有明海と不知火海を分けており、その基部に宇土城跡をもつ西岡台がある。

宇土半島の骨格をなす宇土山地は地質時代の第三紀中新世末から第四紀鮮新世にかけての山陰火山帯の活動によって島原海湾中に形成された島である。ついで鮮新世末におこった周東海変動によって現在の熊本平野、不知火海域の部分が凹地になり、同時に土砂の堆積作用が始まったものとされる。[①]

したがって現在は宇土山地は本土に続く半島となっているが、往時は宇土―松橋間の狭隘をひたす浅海によって本土と断絶した一地塊であった。そして西岡台は住吉地塊などとともに宇土島の北辺に点在する島の一つであった。[②]

時代の下降とともに白川・緑川・浜戸川によるデルタによって宇土島は半島となり、西岡台は半島上の一丘阜となり今日の地形となったと考えられる。

西 岡 台　国土地理院発行二万五千分の一の「宇土」図幅の西端から8.8㎝、南端から4.1㎝の地点に記念碑をもつ小丘がある。その西方約8㎝の地点に、また一つの小丘がある。

この二つの小丘を中心にして20ｍの等高線で囲まれた台地が西岡台で、宇土城跡の所在地と伝えるところである。

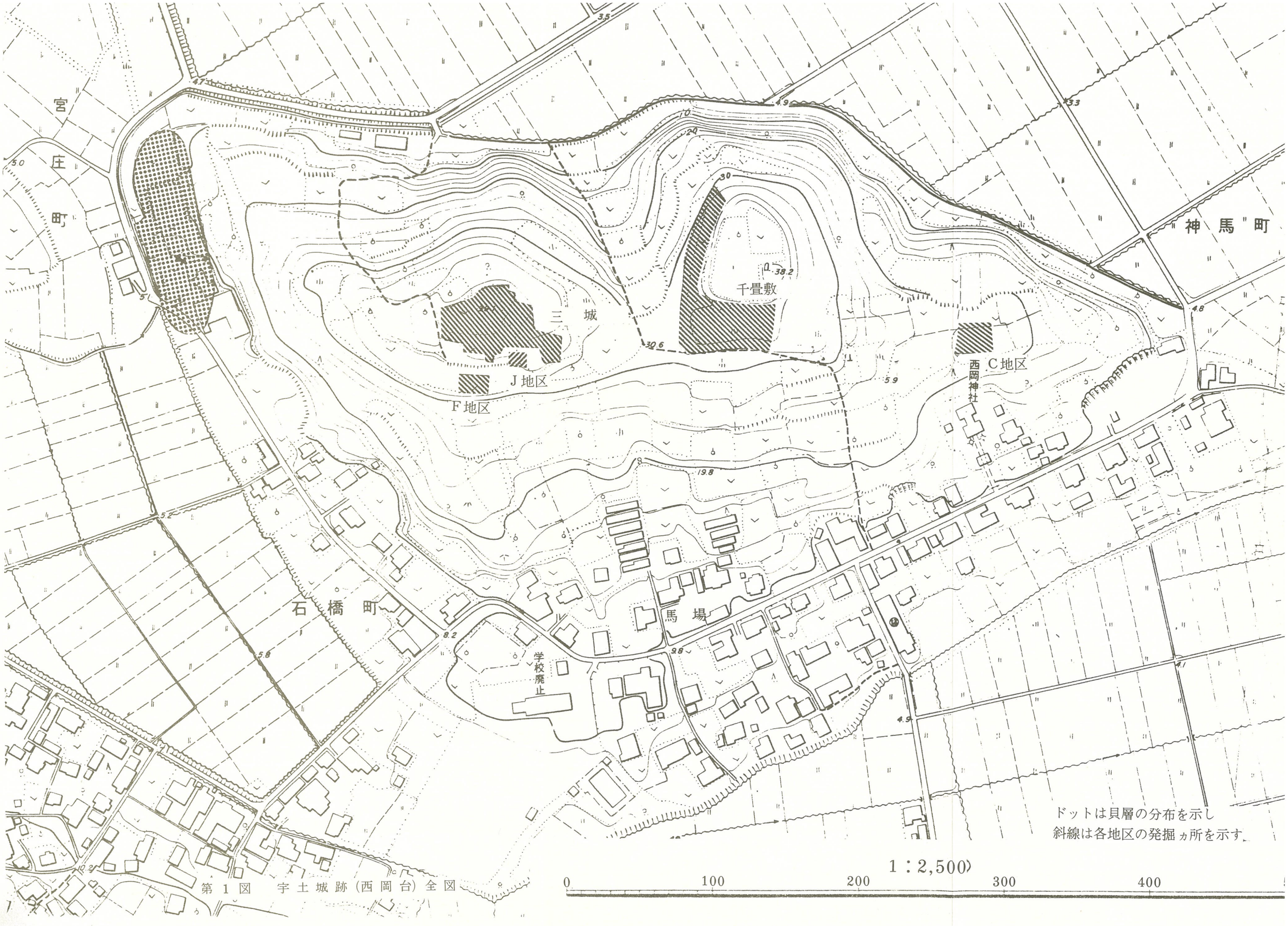
この台地は前項のような地形成因の当然の結果として、台地の周辺は標高3～5ｍの低平な沖積平野となっている。

台地の北方低地は近世の干拓を受けるまでは葦におおわれた一面の大沼沢地であった。[③]宇土藩第4代の藩主細川梅山が選んだ「宇土八景」の中に「山下の落雁」の一景があげられ「やましたの田面の友にさそわれてふたたびおつる天のかりがね」の和歌がある。[④]「やました」は西岡台北側地域の呼称である。細川梅山の18世紀前半ごろまでも、まだ雁のおりる湿地帯であったことがわかる。

台地の南方は北方よりも数ｍ高く、約400ｍをへだてて神原山（58ｍ）・白山（218.2ｍ）の山麓に接している。

台地の西は約400ｍの低地を挟んで轟水源をもつ白山々麓に続き、北西方、やや遠くはなれて椿原山地に対している。

台地の東には、この台地と一体をなす標高16.3ｍの小丘があり、城山と呼ばれ、小西城跡がある。小西城跡の東側は雁回山地（314.4ｍ）との間に標高3～4ｍの低地をはさんでいる。



第1図　宇土城跡（西岡台）全図

この低地を鹿児島本線と国道3号線が南北に通じ、その狭隘を扼する位置に小西城があり宇土城（西岡台）がある。

宇土城、小西城を交通上からみれば、両城はともに宇土―松橋間すなわち熊本―八代間の南北交通の要地であった。また、中世末期に、宇土方面より天草方面に行くためには、西岡台の南麓をとおり轟水源の後方をまわり三蔵谷、網引、網田にいたり山を越えて郡浦へ出て渡海したと言われ[⑤]、ここは東西交通の起点でもあった。

西岡台の二つの小丘の東のものを「千畳敷」といい、頂上の平場は標高37.5m、東西約50m、南北約65mで、その東南隅に直径約15m、高さ1.2m余の微高地がある。そこに宇土市教育委員会による「名和伯耆守屋敷跡」の標木があり、昭和11年建立の「西南役記念之塔」の巨大な記念碑がある。

西の小丘は「三城」と呼ばれ千畳敷丘頂との間に70mの鞍部を挟んでいる。丘頂の平場は標高39.3mで千畳敷よりやや高い。東西約50m、南北約30m、既に耕作によって表面は削平が進んでいる。

西岡台の表層地質は、恵塚・野鶴地区と同じく金峰熔岩、網津熔岩と同質の安山岩質の岩石から成り、岩片の固さから言えば、固さの順にa、b、c、d、eで示した場合、aすなわち「はなはだやわらかい」区分に属し岩体のかたさの順で示した場合、1.2.3.4.5の4すなわち「ややかたい」区分に属している[⑥]。

この表層地質の性格が千畳敷の溝・堀構築の場合にも、三城の城館の建築にも大きな影響をあたえていることを調査の過程で強く感じさせた。　（原口）

注　① 松本幡郎他「人類以前の熊本」

② 経済企画庁・熊本県「熊本」付録「表層地質図―熊本（地形・表層地質・土じょう調査）所収によった。

③ 井上正「小西・加藤両氏時代の宇土」（宇土市史）所収

④ 宇土市社会教育課―宗雄氏のご教示による。

⑤ 井上正氏前掲書

⑥ 経済企画庁・熊本県前掲書

2　周辺の遺跡から見た西岡台

富　樫　卯三郎

1、はしがき

熊本県中部西海岸の宇土半島基部、宇土市中心部の西方近く名和氏の城跡と伝えられる通称西岡台がある。

宇土市周辺の遺跡を探求しはじめから遅々とした歩みであるけれど、20年余西岡台は実に考古学的盲点の地帯であった。

縄文時代の轟貝塚と弥生時代甕棺の出土した通称城山（小西行長築城）の間に横たわる独立丘陵として西岡台に古代人活動のなんらかの痕跡も見出されないことは、長い間疑問であった。

今回、宇土市立鶴城中学校建設のためその事前調査から西岡台の謎が解明されるに至った。

半島基部宇土山塊の東辺と木原山やその南麓の丘陵西辺が挾むほぼV字状の平野がある。その平野へ基部西側から突き出た形の丘陵が西岡台で、標高約40m、東・北・南3方を見渡し、北に緑川の曲流を眺め、また有明海を望み、南に宇土山塊尾根上に擂鉢山古墳などが控え、またやや遠く宇賀嶽古墳の丘陵を見はるかし、西南近く白山（標高 216m）の迫る形勝の地を占めている。

西岡台は東西最大の長さ約700m、南北最大の幅約370m、東西両端へすぼまった形をなし、丘陵上東西に約 140mをへだて、千畳敷（標高38m余）と三ノ城（標高39m余）の両丘が対峙している。

西岡台東端東方約 100mに城山（標高16m余）がある。また西岡台西端からわずか離れて、轟貝塚の微高地がある。轟貝塚に面して西岡台周辺の1角で、かって採土が行われ、貝層断面が露出し、1部を調査し、西岡台貝塚とよんだことがある。最近その1角西側で採土があり、県文化課の調査が試みられた。①

2、西岡台周辺の遺跡

西岡台周辺は、半島基部の底辺に当り、5万分の1地形図上で、仮に住吉・亀崎の間の直線距離をはかれば約9km、半島基部中央宮ノ庄から半島先端中央に垂直にとれば約21kmで、さして大きな半島ではないが、半島中央部を宇土山塊が縦走し、南北両岸に多くの小丘陵が出張っている。

近年、半島全域の遺跡発見が相ついでいるが、全貌をつかむにはなお時日を要する。

与えられたテーマは、西岡台の周辺であり、一応半島基部をめぐる遺跡について若干とり上げ、地形上の立地に注意しながら記したいと思う。

(1) 縄文遺跡

宇土半島周辺では、まだ旧石器時代の遺跡は発見されていないようである。調査の進んでいないせいもあろう。ただすぐれた縄文遺跡のいくつかあることから、それらを遡る旧石発見の可能性も残されているのではないかと臆測される。

先ず宇土山塊と木原山やその南麓丘陵がさし挾むV字状平野の東西両端に、図上直線距離4㎞余をへだて、西に宮ノ庄の轟貝塚、東に曾畑貝塚がある。両貝塚とも標式土器を出土する主鹹貝塚として知られている。

東北アジアから韓国へ広い分布をもつ櫛目文土器と曾畑式土器の関聯が指摘されている。[2] ソウル岩寺洞出土の尖底深鉢胴部のW字形連続並行斜線の文様と似たものが西岡台貝出塚土の土器口縁下に見出されたが、器形や線の彫り・幅や数もちがう。曾畑式土器は九州西岸を主とし、南島まで広がっている。曾畑では、最近県文化課の1部発掘が行われた。[3]

かって轟貝塚東南約700 mの水田下から曾畑式土器を出土した馬場遺跡があり、注目されたが、圃場整備で消滅した。[4]

瀬戸内、山陰方面から九州へ入ったとみられる繊維を含んだ貝殻条痕文の尖底深鉢を出土した轟貝塚は、縄文時代を通じて生活が営まれたらしく、貝塚西北では水田下に縄文後期鐘崎系の土器が出土したことがある。

西岡台西辺の貝層の露出は早く注目され、土器製作器台とみられる鯨骨に阿高系土器片が伴出した。[5] 西岡台貝塚は轟貝塚と一連のものとみられ、その最下層からみみず張れ状の微隆起線文の土器片が出土した。また長崎県深堀遺跡出土単独銛と似た形の石器、[6] 小形の刻みと穴のある笄状やナイフ状（鹿角製）の骨角器が出土している。

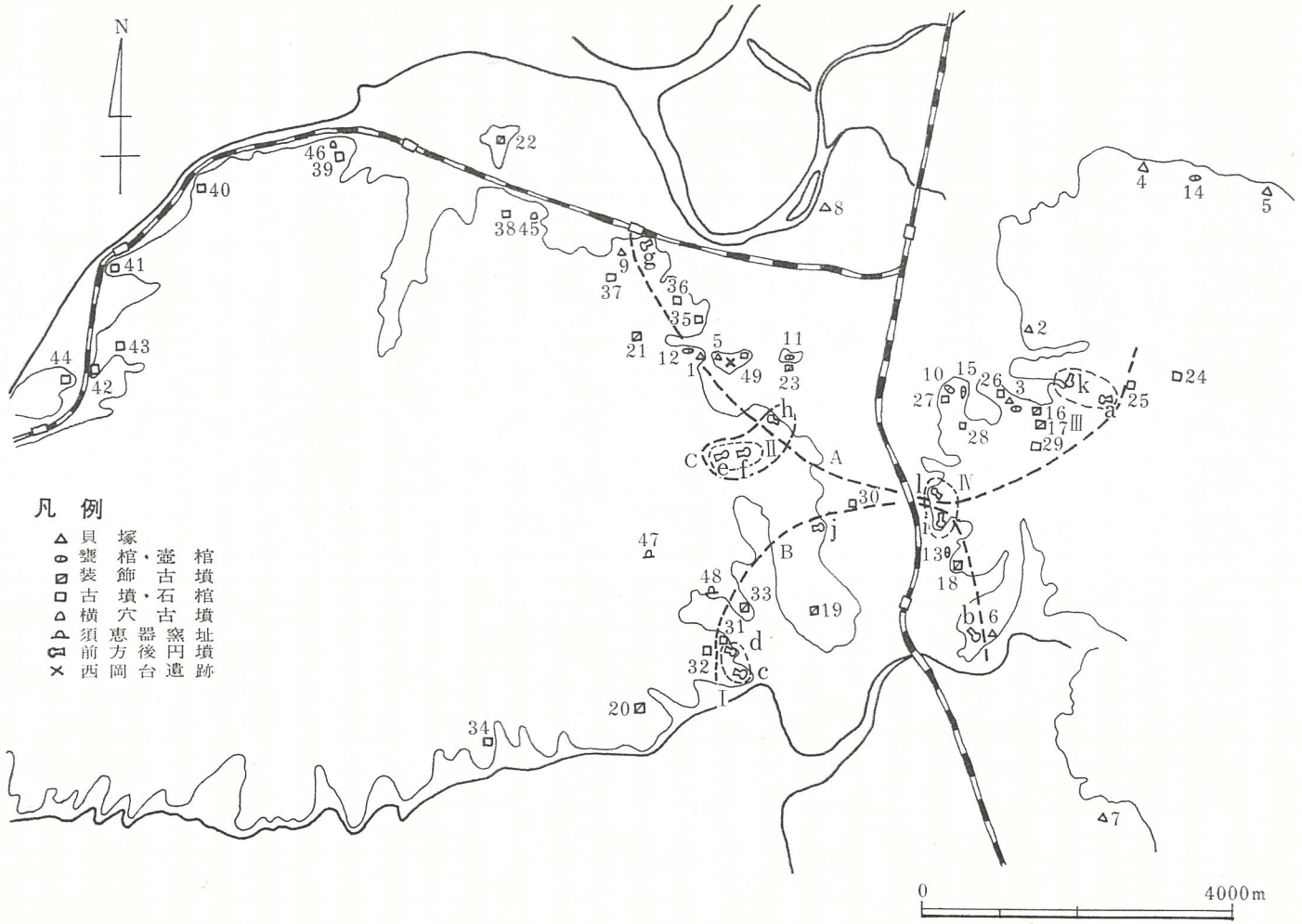
曾畑貝塚南方約700 mの舌状台地に御領式土器を出土する古保里貝塚がある。古保里でかって宅地造成の折、御領式土器その他が出土した。

御領式土器は黒色磨研の深鉢形土器が特色をなし、ソビエシ貝塚東方2㎞半の城南町御領貝塚の標式土器として知られている。台地突端上にある主淡貝塚の御領貝塚西北約500 mに浜戸川に接する主鹹貝塚の阿高貝塚があり、縄文中期いわゆる太形凹文の土器を出土する。先学により肥後縄文編年の基礎が据えられたはこの両貝塚による。[7]

ソビエシ貝塚は、かつて木原山北麓平原・木原間の道路工事の折、縄文後期の土器を出土したが、道路敷となった。木原山北側の聳えた巨岩が迫り、岩陰遺跡という見方がある。

V字状平野中央から南辺へかけ、平野東側の微高地に押型文、条痕文の土器の表採された松山山内遺跡[8]や押型文・黒川式や圧痕文の土器の採集された不知火御領の嫁坂遺跡がある。[9]

またV字状平野南端東方近くの松橋大野貝塚から、かつて御領式に伴なう隆起文様の注口土



第 1 図　宇土半島基部における遺跡分布図

第1表　宇土半島基部における遺跡分布図地名表

貝塚	甕棺・壺棺	装飾古墳	古墳・石棺	横穴古墳	窯跡	準高地性集落・山城
△	●	◪	□	△	△	×
1 轟	10 境目	16 晩免	24 三日鬼ノ岩屋	45 城塚	47 元米ノ山	49 西岡台遺跡
2 曽畑	11 城山	17 潤野	25 女夫塚(女塚)	46 小部田	48 朱斗	
3 古保里	12 北平	18 宇賀嶽(岡岳)	26 古保里			
4 ソビエシ	13 不知火出町	19 不知火塚原	27 境目			
5 阿高	14 木原	20 桂原	28 松山			
6 大野	15 善導寺	21 仮又	29 西潤野			
7 宮島		22 梅崎山	30 小曽部鬼塚			
8 築篭		23 宇土城跡	31 八ノ久保			
9 野鶴		33 鴨籠	32 道免			
			33 鴨籠			
			34 永尾鬼ノ岩屋			
			35 榛原			
			36 金嶽山			
			37 神ノ木			
			38 城塚			
			39 御殿山			
			40 小池平			
			41 小松			
			42 塩屋1号			
			43 塩屋2号			
			44 マブシ			

器などが出土しているという。[10] 大野貝塚東北2km半の古保山南の台地から押型文土器が採集されたが、最近地均し工事でその散布地は消滅した。

V字状南端大野貝塚南方約2.7kmの台地に松橋両仲間の宮島貝塚がある。先学によりかって発掘され、「表層及び次の混土貝層上部には弥生式土器、それより貝層上部には連点及び細形刻文の曽畑式土器を出し、最下層には細帯隆文土器がある。」との指摘がなされた。[11] 細帯隆起文は轟式のみみず張れ状のある土器で、轟→曽畑の編年がそこにある。

最近、松橋微雨遺跡から縄文後・晩期の土器が出土した。

俗にウトシマとよばれる宇土半島は、島であったといわれている。轟貝塚のある畑地の字名はスサキで、曽畑貝塚のソバタも海辺を意味する。両貝塚とも有明海沿岸から数km奥まった微

高地に立地している。それはV字状平野南辺不知火海についても同様で、松橋大野貝塚・宮島貝塚などの例がある。

早・前期の貝塚の発達した所からみて、半島基部の有明海側がいち早く先史文化の吹き溜りをなした観がある。

立地の点からみれば、轟・曽畑両貝塚とも山麓縁辺の微高地にあり、ことに轟には背後地に湧水があり、湧泉周囲集落のおもかげが窺われる。

縄文後期の古保里貝塚は、狭小な舌状台地の上にあり、城南町御領の大貝塚が高台地にあるのと類似した点が注意される。御領の多量の貝殻は「貝のむきみ」として交換物となった捨て殻という見方は興味がある。[12]

御領式の黒色磨研土器は、山東半島竜山文化の黒陶が遼東から朝鮮半島へ、さらに西日本に及んだものではないかということが指摘され、[13]有明海に臨む立地の上からも注目される。また御領式の古保里貝塚から土掘り具か漁撈具かとみられる双角状三角形の扁平石器なども出土している。

(2) 弥生遺跡

宇土山塊がわだかまり、調査の不行届きもあるけれど、宇土半島は弥生遺跡の少ないことが指摘された。[1]弥生式農業は必しも広い平野に営まれたとは限らないようである。

宇土半島基部では宇土市境目遺跡は、弥生時代から古墳時代へかかる遺物包含地として注目される。[2]

V字状平野中央の東側古保里貝塚西方約600 mの台地上で、昭和28年、境目・善導寺間の切通し拡幅の折、境目側崖面から弥生中期の大形合せ口甕棺が出土し、また近年その向い側善導寺側崖ぎわの畑地からほぼ同じ大形甕棺片が出土して、甕棺墓地の一端を窺わせた。境目・善導寺では甕棺が畑地の畦路下に残存していた他の例もある。甕棺はほとんど鋤き返されて、消滅したのではないかとみられる。境目からは石庖丁・扶入石斧・蛤刃石斧・石皿や凹石などが、耕作の折に出土している。弥生時代の銅戈を模したといわれる石戈も1例であるが、出土している。[3]

宇土市中心部西方1 km半の通称城山（標高16 m余）の本丸台地跡西端の崖面から、昭和38年弥生中期の大形石蓋甕棺が出土した。棺内には屈葬人骨1体が埋納されていた。[4]

それより先、昭和34年轟貝塚北方山寄り北平の畑地から黒髪式と須玖系の合せ口甕棺など3基ほど出土した。それらは大形ではなく、中形であった。

境目のは鉢形土器を蓋とした須玖式甕棺で、口縁下に1条、胴部に2条の凸帯がある。城山のは口縁下の凸帯がなく、胴部に2条ある。北平は、黒髪式のは口縁下に1条の凸帯、須玖系のは口縁下に1条の凸帯、胴部に2条ある。上記の甕棺内にはすべて副葬品はみられない。須玖式といっても、青銅器副葬から分類された須玖型の甕棺墓ではない。[5]

北九州に盛行した甕棺葬の姿は、佐賀県姫方遺跡でも驚きであったけれど、宇土は大形甕棺の南限に当る地帯とみられる。境目→城山→北平とV字状平野の中央にわたっている。縄文早・前期の貝塚も中央やや北に分布して、北九州や有明海の方面からの影響が注目される。

さて標高16m余にすぎないが、城山の場合、本丸跡台地の東辺南北両崖面から弥生前期にかかる土器片が出土し、その南崖面中腹に袋状貯蔵穴断面が3基ほど露出して、その1基からドングリ状の実や弥生前期の土器片が出土した。貯蔵穴西方近くの本丸跡への登り路で埋まった凹石、その路わきで重弧文土器片などが採集された。その付近の地下に弥生住居跡があったのではないかと思われる。

本丸跡台地西端からは大形甕棺が出土しており、東辺に弥生住居跡の存在が考えられる本丸跡には準高地性集落が営まれたことがあったのではないかと想像される。また本丸跡台地は、現在U字形の空濠がめぐらされているけれど、或は弥生時代の溝状遺構が、築城の際、掘りひろげられるゆかりをなしたのではないかということが考えられる。この想像にみちびかれたのは、西方の西岡台遺跡で古墳時代の古式土師器を出土するV字溝が戦国時代の山城の箱ぼり掘鑿に利用されたという実証があるからであった。

弥生時代から古墳時代へかけ、城山台地から西岡台周辺へと生活の根拠地が移行したらしく、それは一層防禦を必要とする、なんらかの生活の変化が生じたためではないかと思われる。城山の台地東方へ緩かに続く斜面東端近く重弧文土器片などとともにジョッキ形土器が出土している。この土器の祖型は山東半島の竜山文化に求められるようである。[6]

重弧文土器（免田式土器）は、城山のほか境目台地、松山、不知火出町などから出土し、ことに松山では長頸壺の完形品が他の土器とともに見出された。重弧文の文様の大きさ、浅い線彫りや丹塗りのちがいはあるけれど、V字状平野一帯に分布しているらしい。重弧文土器は、長頸壺などの様式から供献用の土器であることが窺われる。文様などからみて、この種の土器専門の作り手がいたのではないかと思われる。

さて壺棺が、古保里貝塚南端の幼稚園敷地造成中に2・3基が出土した。古保里西方の善導寺甕棺出土の付近からも幼児用とみられる小形壺棺が出土している。

V字状平野南辺の東側不知火出町の弥生遺跡B地点から出土した8個の壺棺のうち、3個の合せ口壺棺は並行の状態に埋葬されていた。鉢形土器の蓋を使い、刻み目凸帯が壺の頸部と胴部に1条ずつある。壺棺の器形は、伊佐座式土器並行とみられる。出土の土器中、頸部の欠けた丹塗り重弧文壺形土器がある。同A地点から鹿角製刀子、碧玉製長さ3.5cmの勾玉などが出土し、副葬の土器がなく、弥生時代かどうか、勾玉は古墳時代とみられるようである。[7]

壺棺について、かって木原山北麓六殿宮近くの桑畑でも合せ口壺棺1基が出土した。V字状平野南端の東側松橋の上野原・大塚台地は縄文・弥生から古墳時代へわたる遺物含地として注目されている。その地帯松橋高校近くの畑地から口縁下に蛇を朱で小さく描いた小形の坩が出

土しているが、土師器の疑いがある。

(3) 古墳遺跡

半島基部中央にある轟貝塚の微高地東へわずか水田を挟んで、貝塚の西端に露出した西岡台の丘陵がある。また西岡台東へわずか離れて、弥生遺跡のある城山の丘陵がある。西岡台上は、今回の調査まで、長い間遺跡・遺物の目ぼしい出土がなく、考古学的盲点の地帯であったことは前述した。

半島基部では縄文・弥生時代から古墳時代へと進むにつれ、遺跡の数は著しく増加している。古墳の場合、多くは墳丘が失われたものか、半壊したものなどといってよい。石棺墓が目立つが、甕棺と同じく副葬品はほとんどみられない。石棺墓の大形化したものもある。半島基部で古墳の特色を示すものは、近年発見の続いた前方後円墳があげられる。

なお線刻の舟を主とした装飾古墳がある。半島基部の地理性とかかわりがあることは明らかである。半島基部の前方後円墳被葬者と線刻の舟のある装飾古墳被葬者とのつながりなども改めて注目される。

① 石棺墓

善導寺と切り通しで接し、善導寺とともに甕棺の出土した境目台地では切り通し南約100mに東西に流れる深堀がある。深堀南側台地西方の傾斜地で団地敷地造成の折、8基の箱式石棺や5基ほどの粘土床が出土した。石棺は板石状自然石の組合せ式のもので、その配置はいろいろであった。また粘土床の周りは石組みがみられず、その1基は弥生後期とみられる甕棺下方から発見され、U字形のカーヴをなしていた。鉄鏃2、小玉1、小玉破片1がそれぞれ各石棺から出土し、人骨片は5基にあった。枕石は2基の粘土床や敷石床の石棺内に1個ずつ設けられていた。ブルトーザの動く合い間に調査したもので、いま思えば、石組みのない粘土床の中には方形周溝墓もあったのではないかと思われる。[①]

かって耕作の折、深堀南側台地から箱式石棺1基が出土し、また境目南隣りの松山の畑地からも同じく1基が出土したが、後者は粘土にくるまれ、ヤリガンナ1個が出土した。

境目東方に続く古保里は木原山南麓に続く舌状台地で、箱式石棺群がある。御領式貝塚の付近にあり、貝塚南側に壺棺が2、3基出土している。石棺は5基ほど数えられ、そのうち3基が調査された。H氏宅庭内出土の石棺は粘土でくるまれ、鹿角製刀子、櫛の一部、I氏宅改築中出土の石棺は床面下に木炭層が出土し、短剣1振・小形仿製鏡1面・勾玉2個、管玉1個、小玉32個、ヤリガンナ1個、N氏畑地出土の石棺は鉄鏃2本、ヤリガンナ1個、小玉などが副葬されていた。人骨はH氏庭内のでは2体、I氏宅のでは土枕があったが人骨は不明、N氏畑地のでは3体（男1、女2）であった。

古保里石棺群は、他と較べて遺物があり、近くに壺棺の出土もあって、小形仿製鏡の棺内副葬とともに注意をひかれる。弥生終末から古墳前期とみられるものがある。

古保里のH氏庭内出土の箱式石棺は粘土にくるまれていたが、戦時中発見せられた時、古代人の大きな手形が粘土についていたという。

宇土市楢崎古墳は木原山南側花園山東南斜面チョウヅカ山の上にあり、立岡池に臨んでいる。3基の家形石棺、1基の石蓋土坑がすべて小口側壁を東西1線に揃え、埋置されたもので、その北すぐ下方に周りに石組みをもって箱式石棺1基がある。

チョヅカ山南西約750 mのドウヤマとよばれる独立円丘上に晩免古墳といわれる花園陵墓参考地がある。家形石棺の内壁に線刻の円文、浮き彫りの菊花文があるという。屋根形石蓋の両側に流れる10本の刻線もある。

ドウヤマ南約300 mの丘陵上に資盛さんの墓という潤野古墳がある。家形石棺の内壁に線刻の矩形内3個の円文がある。②

ドウヤマ西方約800 m神ノ山で採土の際、大形の家形石棺が出土した。その奥壁の2個の突起上に直刀一本がのつていた。

神ノ山南方約2.5 kmの宇賀嶽（岡岳）古墳は巨大な家形石棺状を呈し、屋根形の巨石と屋根形状長方形の石蓋が石室内に落ち込み、開口した前面に長方形の片面丸味をもつ石材が横たわつている。それは石造物の疑いがある。奥壁2個の突起をはさむ線刻の並行線間に11個の円文、並行線に三角文が連続し、なお他の線刻文がみられる。

石棺内壁の突起は、楢崎古墳第2号棺、晩免、潤野両古墳、神ノ山古墳、宇賀嶽古墳にあるほか、不知火町国城古墳横穴式石室内家形石棺奥壁に4個の突起の例がある。突起が宇土市東辺から松橋、不知火へ分布していることが注目される。また突起が、家形石棺とかかわりのあることも注意される。

箱式石棺はあちこちに出土しているが、最近長浜井崎鼻の丘陵上でも有明海に臨む形で2基並存の石棺の例は興味をひく。また、西岡台東端丘陵上への取付け道路の工事中に、敷石床の箱式石棺1基が出土し、驚かされた。境目その他の箱式石棺とちてがい、狭長な点が目立った。

熊本市広木方形周溝墓出土の箱式石棺は、形式や石材など千金甲権現山中腹出土の石棺と似ているようであった。宇土方面の箱式石棺とは石材その他系統が異なるようにみられる。

宇土半島沿岸のそれぞれの丘陵突端上には古墳が発見されるといってよいくらいである。

低い台地上の箱式石棺と高い丘陵上にある石棺とは、立地の上からどんな性格の違いがあるか、まだ明らかになっていない。

なお箱式石棺巨大化の例として宇土市下綱田マブシ出土の石棺がある。小口の側石を2枚ずつの板状の側石で囲い、礫床に鉄鏃4本がかたまって残り、石棺外側に刀子1本が見出された。礫床は両端がやや高くなり、埋葬は2体以上ではなかったかとみられる。③

巨大化した箱式石棺系の例とし城南町塚原古墳群の凝灰岩石棺や豊野村北ノ原出土の石棺などの例がある。

最近熊本市山尻遺跡の住居跡付近から3面の小形仿製鏡が出土している。改めて古保里箱式石棺の小形仿製鏡が注意される。

② 装飾古墳

半島基部をめぐって、線刻の舟をもつ4基の古墳のほかに、宇土城跡（小西行長築造）出土の石垣石材のものがある。

有明海側に仮又、梅崎山両古墳があり、不知火海側に桂原・塚原第1号両古墳がある。宇土城跡石垣石材のものは、どちらかといえば、有明海に臨んでいる。どれも壁画系に属する。

有明海側では、轟貝塚西方約1㎞谷合いの丘陵北斜面に仮又古墳がある。④ 巨石墳で、鬼の岩屋とよばれ、石室は竪穴のようであるが、南側壁は床面からやや浮いた形で、落ち込みの石かと疑われる。また南側壁の先に伸びた石は横穴式石室を偲ばせる。線刻は奥壁になく、両側に線刻の舟がある。舟のほか、多くの縦線、曲線がみられ、西側壁上の石に木の葉形の曲線がみとめられる。木の葉形は宇土城跡出土の石垣石材にもあり、鳥の羽と見て舟と鳥と死霊の関聯を考える見方もある。⑤

仮又古墳東北約3㎞の宇土山塊から分岐した丘陵上に梅崎山古墳がある。半壊の巨石墳で、横穴式の疑いもある。玄室東側壁の内面に1隻の大きな舟を主とした線刻がある。舳から艫まで1.29ｍ、舟底から舳・艫を結ぶ線までの高さ54㎝、舟底に右上から左下へ20本余の櫂（或は櫓）の線があり、川舟ではなく、海を行く舟とみられる。この大きな舟は現実的な量感があり、被葬者の海上活動を偲ばせる。⑥ 舟の上方に多くの縦線や弧線が入り乱れ、大分県伊美鬼塚古墳の舟や人の線刻にも多くの縦線などが見られ、描法に似たものを思わせる。

不知火海側に臨む不知火町桂原古墳は標高約70ｍの丘陵斜面にあり、周りを削られた円墳南側に開口した横穴式石室である。前方部は崩壊していたが、最近保護施設がつくられている。玄室内奥壁石棚上方に二重円文があり、浮彫りのように見える。線刻は羨道部・玄室にある。玄室の石積みにいくつもの舟が線刻されている。墳丘上から不知火海が望まれる。

桂原東方約2.7㎞の丘陵上に不知火塚原古墳群がある。その第1号墳は墳丘の盛土が失われ、巨石が露出している。羨道・石室側壁・天井石に線刻の文様がある。線刻の舟は桂原ほど多くないが、さしば・柱状の線刻・斜め格子状の文様もある。⑦

線刻の舟は、宇土市古城町宇土城跡出土の石垣石材にもみとめられる。宇土小校庭に運ばれた石垣石材にも発見され、またH氏庭内に運ばれた石垣石材や空濠へ落ち込みの石垣石材などにもある。舟のほか2本足の鳥や蛇とも舟とも分らない線刻などがある。宇土城三の丸跡で宅地造成の際、小玉の熔融密着した小片を表採した。古墳のあつたことが推測される。⑧ 装飾の石材から横穴式石室ではなかつたかと思われる。石垣の装飾石材は、現在市の収蔵庫に保管。

半島基部の不知火町鴨篭古墳は、亀崎古墳群丘陵と塚原古墳群丘陵の間に突出した丘陵上にある。4枚の巨大な砂岩切石に囲まれた中に底部舟形状を思わせる家形石棺が置かれた。福岡

県石人山古墳の家形石棺と同じく棺蓋に直弧文・同心円文・帯状文・梯子形文などが線刻され、赤・青で塗られていた。5世紀後半とみられている。[9] また鴨篭古墳は前方後円墳であった疑いがあるという見方もある。

亀崎古墳群中の国越古墳の横穴式石室内奥壁に接した家形石棺の屋蓋軒まわりに直弧文、軒縁に三角連続文が赤と青で塗りわけられ、また石棺両袖口に梯子形、直弧文があり、赤・青・緑・白で塗りわけられている。着色のある幾何学的文様の点で宇賀嶽古墳とのつながりが考えられる。古墳副葬品から6世紀前半に編年されている。[10]

石室は羨門部および羨道を露出したまま埋め戻して保存。

装飾古墳は、はじめ石棺系の幾何学的文様が注目され、大阪府安福寺の割竹形石棺、福井県足羽山の竪穴式石室内の舟形石棺などの直弧文の装飾は4世紀末といわれる。九州で直弧文を主とする石棺系の装飾は、5世紀後半頃上記の家形石棺などにみられる。

家形石棺系の、幾何学的な円文・三角文や菊花文のある晩免古墳や円文・波文のある潤野古墳は楢崎古墳南方約800mにあり、陵墓参考地で知られ、装飾古墳として宇賀岳古墳とのつながりが考えられる。

舟の線刻をもつ古墳は横穴式石室系とみられ、6世紀頃を中心とするようである。

半島基部の前期古墳被葬者は地域社会の首長級のものであろうが、水軍を支配・指揮して活動したと思われる。線刻の舟の装飾古墳被葬者は、臆測すれば、前方後円墳被葬者の下で水軍の統制・指揮に当ったリーダーではなかったかとみられる。かれらは遠く中国・朝鮮へ出かけたことも想像される。とにかく、線刻の舟の古墳は、有明・不知火両海へそれぞれ面した立地を占め、前方後円墳被葬者の海外発展を促した海上勢力の保持者であったのではなかろうか。

③　前方後円墳

宇土半島基部をめぐって、10基の前方後円墳があったが、昭和50年さらに1基の古墳が前方後円墳として県指定となった。また現在消滅したけれど、もう1基半壊の粘土床をもつ竪穴式石室墳は前方後円墳ではなかったかとみられる。それら2基を加えると、計12基が数えられる。

半島基部にそれらが寄り集っていること、それは1つの古墳群をなしているとみることができる。熊本県中部西側で宇土半島はほぼ東西に伸び、北方有明海と南方不知海を分け、島原半島や天草島などに囲まれ、内海の様相を示している。また半島基部は、熊本平野と八代平野を結ぶ狭隘地帯をなし、南北のルートを扼する地形を呈している。上記の2点から半島基部の地理性が窺われる。

12基の前方後円墳を一つの古墳群とみることは、それらが円墳などではなく、前方後円墳であるところに注目される。前方後円墳は、天皇陵古墳などが示すようにその地域一帯を支配する首長級の墳基形式であることは知られている。

半島基部の宇土山塊側宇土市の通称城山（小西行長築城）を中心に半径5kmの円を描くと、

12基の前方後円墳はすべてその圏内には入ってしまう。

それらの前方後円墳は立地の上から見れば、地形的に半島中央部にわだかまる宇土山塊などから次のグループに分けられる。「宇土半島基部前方後円墳群」一覧表の前方後円墳の符号を参照されたい。

Aグループ…このグループは半島基部で宇土山塊北側および木原山南麓の丘陵に位置し、有明海側に面し、また有明海を望む側に数えられるもの。a（女夫塚）、k（楢崎）、l（チャン山、また茶臼山）、h（城ノ越）、g（天神山）の5基。

Bグループ…このグループは半島基部で宇土山塊南側および木原山南麓に続く丘陵や大塚台地に位置し、不知火海側に面し、また不知火海を望む側に数えられるもの。b（大塚）、i（向野田）、j（仁王塚）、d（国越）、c（弁天山）の5基。

Cグループ…半島基部の宇土山塊中央の尾根上に位置し、最高の地位を占め、有明海・不知火海両方面を望み、また逆に両海側の平地および海上から仰がれるもの。e（擂鉢山）、f（迫ノ上）の2基。なおこの尾根に続き、fの東北約600mの丘陵突端上に位置し、有明海方面を望むものにAのhl基があり、地形的にCグループにも数えられる。

A・B・C3グループの中、地形的にそれぞれ比較的近距離に位置しているものに次の4グループがある。

Ⅰグループ…Bのcとdの2基。亀崎古墳群に属し、それぞれ亀崎の丘陵突端上にあり、不知火海に臨んでいる。

Ⅱグループ…Cのeとfの2基。上記の通り、12基の中で最高の地位にあり、半島基部の支配的位置を占めているようである。

Ⅲグループ…Aのaとkの2基。木原山南麓の丘陵に続く台地縁辺および花園山東辺の突端上にあり、それぞれ立岡池に臨んでいる。

Ⅳグループ…Aのlと Bのiの2基。宇土山塊と木原山南麓に続く丘陵がさし挟む狭隘地帯で、それぞれ東側の丘陵突端上にあり、その地帯を扼する形を呈している。

さて古墳時代の前方後円墳の内部主体石室の編年として、竪穴式石室から横穴式石室への移行は、知られている。

半島基部の12基の中、内部主体未調査のAのg、Bのb・jおよびCのeの4基がある。それらの4基を一応おいて、他の8基について編年の順序を考えてみたい。

先ず竪穴式石室として次の3基がある。

Bのcは推定全長53m、耕作で変形された、主軸東西方向の墳丘内に割石小積み石室の下部が残存し、粘土床はカーヴのゆるやかな跡を示している。割竹形木棺の跡であろうか。副葬品は失われたが、くびれ部の墳丘斜面から底部穿孔二重口縁の壺形土師片などを出土した。その土師器片は布留式並行とみられる[11]。福岡県銚子塚古墳の壺形埴輪に最も近いともいわれる[12]。

Cのfはeの下方すぐ近くにあり、推定全長56m、ブルドーザで1部露出した割石小口積みの石室はほぼ完形のもであった。石蓋をはぐと、割竹形木棺の跡のみごとな粘土床であった。fの竪穴石室内には、頭骨片・直刀・鉄剣・刀子や土師器片などが出土したが、期待された古鏡は盗掘されたか、見出されなかった。[13] c、fともに埋め戻して保存。

Aの1は、採土で半壊した竪穴式石室の断面が露出したものである。主軸南北方向の石室は割石と塊石を積み上げた側壁に沿って下部に数個の板石を不規則に立てている。粘土床は落ち込みの石があり、そのカーヴはゆるやかであった。割竹形木棺の跡であろうか。直刀・鉄剣および白銅製の小形鳥獣鏡が出土した。鏡は後漢のものとみられる。[14] この古墳が粘土床をもつ竪穴式石室で、後漢鏡を伴ない、丘陵突端上にあることから、また石室前方への伸びも想像され、円墳というより前方後円墳ではなかったかとみられる。

以上3基は墳形、伴出土器および鏡などから前期古墳として4世紀頃の編年が考えられ、c→f→1の順序であろう。

次に竪穴式石室の前期古墳から横穴式石室への移行過程に、過渡的な様相をもつものとして、Bのiがある。

iは熊本・八代両平野を結ぶ狭隘地帯の東側標高約37mの丘陵突端上にある。地形実測後、緊急調査を試みた前方部は、採土のため全く失われた。平らな後円部頂上に掘り込まれた長さ約10m・幅約7m・深さ1.6mの逆梯子形の墓壙内で、蒲鉾形に近い被覆の粘土をはぐと、7枚の板石状蓋石が並び、その周りに割石が一面にしかれ、割石の周りは帯状に地山が削られている。蓋石を開くと、割石小口積みの竪穴式石室内に凝灰岩の長大な舟形状石棺がある。石棺両端に大きな横穴のある縄掛け突起をもつ舟形状棺蓋は長さ約4mある。棺身は箱形で、底部は台状を呈し、棺内北端に石枕があり、棺の床面中央に排水の細い溝跡があるけれど、溝の丸い水吐口は貫通していない。30代とみられる女性の仰臥伸展葬の人骨1体が見出された。[15]

石棺の長大な点で、佐賀県熊本山出土地下直葬の凝灰岩製舟形石棺は長さ4・30m、前後に縦穴のある半円状縄掛け突起をもち、棺蓋両縁にiの場合と似た短狭な長方形の穴が各3個ある。3区に仕切られた棺内中央区に造り出しの枕があり、2体の人骨がさし合せとなり、納められていた。副葬品とともに5世紀前半に比定されている。[16]

また福岡県老司古墳は後円部内4基の竪穴式石室に横口式技法をとり入れたとみられる出入口が認められ、追葬に便利な横穴式石室初現の形式を示すものといわれる。副葬品とともに5世紀前半と推定されている。[17]

iの場合、後円部の墓坑内東北隅に3段の踏み石が出土し、盛り土前、葬礼時に墓坑内外へ上り下りしたことが注目される。墓道はみられず、また踏み石は石室直結のものではない。墳墓形式および副葬品などから熊本山・老司両古墳をさかのぼる4世紀後半から5世紀初めと考えられる。さらに被葬者が女性であり、祭司的首長の性格をもつものとして興味が深い。iは

埋め戻して保存。

竪穴式石室墳ではないが、注意すべきものにV字状平野中央にあり、有明海側に臨むAのh

第2表　宇土半島基部前方後円墳群一覧表

	名称	発見	所在地	立地	内部主体	全長	後円径
a	女夫塚古墳		下益城郡松橋町 古保山女夫塚620	台地縁辺	巨石墳（石室墳？）	＊46	＊26
b	松橋大塚〃		下益城郡松橋町 前田376～378	台地縁辺	未調査	＊79	＊45
c	弁天山古墳	昭和38年12月	宇土郡不知火町 長崎弁天山619—1	丘陵突端上	竪穴式石室	＊53 〔53〕	＊35 〔35〕
d	国越古墳	昭和38年12月	宇土郡不知火町 長崎国越581	丘陵突端上	横穴式石室 家形石棺	＊65	＊42
e	擂鉢山古墳	昭和40年8月	宇土市神合町 水谷861	尾根上	未調査	＊96 〔100〕	＊64 〔62〕
f	迫ノ上古墳	昭和40年8月	宇土市神合町 水谷865—4.5.6	尾根上	竪穴式石室	＊54(56) 〔58〕	＊28(32) 〔39〕
g	天神山古墳	昭和40年12月	宇土市野鶴町 桜畑1311—1～11	丘陵突端上	未調査	54 (56) 〔58〕	(60)
h	城ノ越古墳	昭和41年4月	宇土市栗崎町 城ノ越658	丘陵突端上	箱式石棺（？）	(43.5)	(23)
i	向野田古墳	昭和42年6月	宇土市松山町 向野田	丘陵突端上	竪穴式石室 舟形状石棺	89 〔86〕	55 〔52〕
j	仁王塚古墳	昭和43年12月	宇土郡不知火町 袖ノ原	丘陵突端上	未調査	(46.8)	21.8
k	楢崎古墳	昭和50年11月 （史跡指定）	宇土市花園町 楢崎428—2	丘陵突端上	家形石棺3基 石蓋土坑 箱式石棺	(32)	(18)
l	チャン山古墳（茶臼山）	昭和42年2月 （墳形推定）	宇土市松山町 南山内2106—1	丘陵突端上	竪穴式石室	(　)	(　)

前方部幅	後円部高	前方部高	遺物その他	現況
＊24	＊5	＊5.5	赤褐色土と黒色土の交互版築 土師器片出土 東方近く残骸の女塚残存	半壊、後円部北側、くびれ部北側が削られる
＊28	＊5	＊3	遺物不明 南側近くの畑地から円筒埴輪10個ほど出土、但し関係不明	後円部上、またその前に石碑や墓碑が立つ 前方部広場化
＊21 〔20〕	＊4.5(6) 〔6〕	＊2.5(3) 〔3〕	底部穿孔壺形土師器、甕形土器、小形丸底坩	埋め戻し保存　後円部、蜜柑畑の高みとなる
＊27	＊6	＊5	画文帯神獣鏡・鹿角製直弧文飾付鉄矛・ガラス勾玉・ガラス小玉・ガラス粟玉・鉄鏃・帯先金具・鉄製帯金具（以上石棺内） 四獣鏡・純金環・純銀環・鉄鏃・鉄刀（東屍床内） 獣帯文鏡・金環・純金環・硬玉製大勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉・銀製空玉・ガラス丸玉・鉄矛（西屍床内） 鉄斧・鉄ノミ・刀子・ヤリガンナ・矛の石突・鉄矛・鉄鋤先・鉄鎌・鉄鏃・雛形鉄斧・同鋤先・同刀子・同鎌・同鍬先・銅製椀・杏葉・辻金具・鉄製帯金具（別床内） 須恵小形高杯・脚台付壺（蓋付）（中央通路） 埴輪円筒片・象形埴輪片（手・釧・鈴釧・壺・大刀）	埋め戻し保存 羨門部および羨道は露出したまま
＊15 〔25〕	＊11 〔12〕	＊8 〔6〕	北側くびれ部に底部穿孔壺形土器列1部出土	前方部道路となり消滅、後円部蜜柑の段々畑となる
＊（15） 〔15〕	＊4 〔4〕	＊2 〔2〕	刀子・鉄鏃・土師片（粘土床から） 鉄剣・直刀・ヤリガンナ・刀子（棺内）	埋め戻し保存　後円部蜜柑畑の高みとなる
(40)	(14)	(9)	後円部東側断面下層から土師器出土　断面に盛り土のあとがみられる	前方部前端垂直にくずれ、後円部東側垂直に削られる
(　)	(　)	(　)	残存後円部から小形箱式石棺出土　採土中、三角縁四神四獣出土（舶載鏡、仿製鏡2説がある）周溝の跡が残る	蜜柑畑となり、消滅
35 〔39〕	9 〔9〕	6 〔6〕	方格規矩鏡・内行花文鏡・鳥獣鏡（麟風鏡）・ヒスイ・勾玉・管玉・小玉・碧玉製車輪石・2枚貝製貝輪（石棺内） 鉄剣・直刀・鉄斧・刀子（石室と石棺の間） 円筒埴輪	前方部は採土のため消滅。
26.8	3.5	3.5	周溝の跡が残る	藪となり、墳形がつかみにくい
(15)	(3)	(2)	直刀・鉄鏃（第1号棺）・直刀（箱式石棺）	盛土がなくなり、石棺など露出したまま
(　)	(　)	(　)	粘土床から直刀・白銅製鳥獣鏡（麟鳳鏡）出土	採土で消滅

註　本表の墳丘計測数値の中、＊は三島計測（古代文化第17巻第3号）
〔　〕は松本計測（九州文化論集一）による
（　）は復元数値

がある。後円部から採土中に径21・7㎝、同形化した2神2獣を交互に配した青銅製三角縁四神四獣鏡が出土している。採土のため墳丘は北斜面が縦断破壊されていたが、前方後円墳であった。残存の後円部から小形組合せ箱式石棺の形をなしたもの1基が出土した。割石の残存はなく、割石小口積み石室ではなく、また横穴式石室の巨石もみられず、採土中出土の丹のついた篇平石2・3個が現地の隅にあり、いま思えば、箱式石棺ではなかったかという疑いがある。[18]

h出土の三角縁神獣鏡は舶載鏡か仿製鏡か、仿製としても鋳上りがよいものといわれる。また仿製としても4世紀後半の古墳に伴なう重要な副葬品の1つという見方がある　Cのe・fの尾根続き丘陵上にあることも注意される。hが前期古墳であるとすれば、或はAの1の前に編年されるかもしれない。

さて竪穴式石室から過渡的な石棺内蔵の竪穴式石室を経て、横穴式石室としてBのdがある。dは不知火海に迫る丘陵突端上にあるcから北方約300m丘陵突端上に位置し、ともに海上から望れるものである。

dの前方部北斜面は早く蜜柑畑として削平されて、円筒埴輪片が出土し、後円部に大きな蓋石の落ち込みが認められた。dの横穴式石室は総奥行2・85m・幅2・16m・奥壁にそって石室の幅一ぱいに奥行75㎝・高さ1・40mの家形石棺をそなえ、石棺前の通路両側にそれぞれ屍床がある。また石棺と屍床の間に狭い別床がある。羨門部に大きな縦形の把手を造り出した凝灰岩の扉石前方羨道下に礫石をつめた排水溝がある。半島基部の古墳としては稀にみる多量の副葬品が見出された。dは副葬品とともに6世紀前半に比定されている。[19] dは扉石を外に出したまま、埋め戻して保存。

dの西方約200mに亀崎古墳群の1基道免古墳がある。横穴式石室の1部わずかな残骸があり、土師器・須恵器の破片、円筒埴輪片などが表採された。dからは円筒埴輪・人物埴輪片などがかなり出土し、道免とのつながりが考えられる。

次にAの東辺で、木原山南麓の台地西辺、花園山東辺近く、立岡池に面してaがある。採土のため大半が失われた後円部の断面に黒色土と赤褐色土が交互に10㎝余の厚さで層をなす盛土の跡が認められる。長さ約45mの前方後円墳で、女夫塚とよばれ、aの東方約130mに残骸の女塚がある。女塚もaと同じく黒色土と赤褐色土が交互に層をなす盛土のあとがみられる。版築の流れをひくものであろう。[20]

aの後円部北側に内部主体の石材とみられる凝灰岩のやや大きなもの1・2個出土していた。割石の残存もなく、箱式石棺ではなく、石室墳の疑いがある。またaは低台地縁辺に位置している。前期古墳でないことは確かで、それ以後のものであろう。

aの西方約500m、同じく木原山南麓に続く花園山東辺で立岡池に臨む丘陵突端上にkがある。kは早く前方後円墳の様相を呈することが指摘されたが、最近前方後円墳として県指定の史跡となって、驚かされた。[21]

kは後円部に3基の縄掛け突起をもつ家形石棺と1基の石蓋土壙がそれぞれ小口側壁を南北の1線に揃えた特異な埋葬のしかたが注目される。そして北方の前方部に当る所に周りに石組みをもつ箱式石棺1基がある[22]。5世紀前半に比定されている。

後円部に複数の石棺埋納の例は、玉名院塚古墳出土の舟形石棺4基の例があるけれど、並びかたがちがう[23]。

A・B・C3グループの中、地形的に近距離にあるⅠ・Ⅱ・Ⅲ3グループについてみてみょう。

Ⅰの場合は、c・dともに内部主体が調査されている。ただ竪穴式石室のcと横穴式石室のdは時期的にずれている。しかもなお、近距離に立地した点に問題があろう。近距離にあることは、或は親縁のつながりがあったか、また地形的に海辺の丘陵に立地するというほか比較的良好な背後地を控えていたためであろうか。或は親縁、背後地両者ともにかかわりがあったかもしれない。

dの近くにある道免古墳は農地造成で消滅したが、dの前にくるか、後にくるか、決め手を欠く。地形実測図では、道免古墳の西方傾斜地は前方部状の広りを示している。

Ⅱの場合は、fは割竹形木棺の粘土床をもつ竪穴式石室であるけれど、eは内部主体未調査である。ただ蜜柑園造成時、eの墳丘北側くびれ部から底部穿孔土師器が部分的であるが1列に並んで出土した。またeはfより高地位標高約100mにあり、半島基部の周辺を見渡し、また逆に仰がれる地位を占め、優位を示している。それは、また被葬者の支配的な姿を偲ばせ、半島基部の前方後円墳中の第1人者ではなかったかと思われる。

おそらくeはfに先立つ古墳で、内部主体は未調査だが、竪穴式石室か、前期古墳にふさわしいものであろう。

Ⅲの場合は、aは内部主体は石室墳か、少くとも巨石墳とみられるが、kは上記の通り家形石棺、石蓋土壙および周りに石組みをもつ箱式石棺が露出している。kは複数の異形内部主体をもつ点に、主として5世紀前半という編年の理由があるのであろう。

kからは花園平野およびaの台地一帯への展望がきく。aはやや奥まつた、立岡池に臨む台地縁辺にあって、落ち付きを示す観を呈している。内部主体や立地の点などからk→aの過程が妥当ではないかとみられる。

試みに編年の順を記すとすれば、次の通りではないかと思われる。

c（弁天山）→f（追ノ上）→h（城ノ越）→l（チャン山）→i（向野田）→d（国越）→k（楢崎）→a（女夫塚）

ただCのeはその巨大さ、その立地から半島基部の主墳といってよいものであるが、編年の上からBのcとのかかわり、c→eか、e→cか、eの発掘が待たれる。

上記の編年について、4世紀代にe→f→c→hとする先学の見方がある[24]。

またe・fを4世紀初頭、hは4世紀中頃、iは4世紀後期、dは5世紀末、aは6世紀初めとする先学の説がある。[28] e・f→h→i→d→aの順となる。

さらにc→f→i→l→h→g→b→d→aとする先学の説もある。[29]

なお、c、f、l、hなど、年代的に北部九州の古式古墳に後続するであろうという先学の見方がある。[30]

cの南方約9㎞に、球磨川河口で不知火海に臨む円墳の八代市大鼠蔵楠木山古墳は、割石積みの粘土床とみられる竪穴式石室で幅約1.30㎞、長さ約4.60㎞、高さ1.20㎞あり、剣、刀子、碧玉製紡垂車、土師の坩および頭骨などが見出された前期古墳の形式をもつものとして、[31] 海上交通からc方面とのつながりが想像される。

なお、末調査のAのg・Bのbは有明、不知火両海浜近くの丘陵にそれぞれ立地していることである。それはBのcが不知火海浜近くの丘陵に立地していることを思わせるが、それぞれcより巨大な点に、或は海上への示威、防衛的な役割をも秘めたものではないかと思われる。

また未調査のBのjは狭隘地帯に臨んでいる点に、Aのl、Bのiとともにその地帯を扼する形を呈していることが注目される。

結　び

「周辺の遺跡から見た西岡台」という与えられたテーマについて、西岡台をめぐる半島基部地域に分布する遺跡について主要なものをとり上げたが、記述できなかった巨石墳・横穴・地下式土坑・窯跡その他がある。

考古学的なミッシング・リングとみられる遺跡・遺物で、この20年間にかなり見出されたものがある。その間、西辺に貝塚をもつ西岡台上は考古学的盲点の地帯であった。

半島基部・半島両側沿岸の遺跡立地のあり方からみて、西岡台の独立丘陵という地理的位置から、長い間なんらの遺跡・遺物の出土のないことは疑問であった。

今回、宇土市教委の調査はその謎を解いて余りあるものがあったといってよかろう。

古墳時代の準高地性集落が西岡台の千畳敷（標高約38㎞）の西南丨角をめぐり、ほぼL字形に出土した大V字溝から確められた。[32] その西南丨角の西側では、戦国時代の山城の箱ぼりがV字溝を利用拡張したものであることが明らかにされた。調査後、西岡台東端で取付け道路作業中に出土した狭長な箱式石棺は、半島沿岸丘陵突端上の古墳立地と全く軌を一にしている。なお仿製獣形鏡が千畳敷西南丨角の南側大V字溝から採取されたことも、半島基部に少ない古鏡の資料として注目される。

さて九州の前期古墳で、玄海灘から周防灘へかけた北九州の場合、前期古墳は点在しているのに対して、半島基部では集中している。西岡台遺跡は半島基部の重要性を裏付ける基本的な資料を加えた。

逃げ城としての性格をもつ準高地集落の営まれた西岡台の千畳敷西側切岸下方で突帯のある円筒埴輪小片が出土し、またV字溝を利用拡張した箱ぼりに古墳のものかとみられる2、3個の巨石があり、また西岡台東端出土の箱式石棺の例からみて、さらに千畳敷の地形からみてもその上に古墳が築かれたことがあったのではないかと思われる。その広さから或は前方後円墳があったかもしれない。

半島基部の緑川が注ぐ有明海側には、櫛目文土器文化の流れが曽畑貝塚に、細隆起文土器文化が轟貝塚に伝播し、また北九州の大形甕棺文化が半島基部中央に波及している。そして古墳文化の前方後円墳は半島基部周辺をめぐり、石棺・石室などさまざまな古墳は半島両岸丘陵から半島先端へと続いている。先年、半島先端の維和島の古墳、大矢野島の長砂連古墳、また天草上島大戸の古墳群を尋ねて、それぞれの立地から古代人の海上活動の一端が偲ばれた。

古墳は、古墳時代人にとって生きるため日常生活の中にあったもので、地域集団の標識をなしたのではないかとみられる。それらの地域集団をささえ、指揮したのは半島基部をめぐる前方後円墳の被葬者やその形成者の一群であったのではないかと考えられる。そして「古墳の時代」といってよい時期のあったことが窺われる。

最近、先学の研究によれば、前方後円墳などの祖型が大陸・朝鮮方面に見出され、それから作られるに至ったのではないかとする見方があり、興味深いものがある。[30]

註

(1) 縄 文 遺 跡

① 緒方勉「轟貝塚（西岡台）の調査」ふるさとの自然と歴史第35号、昭和49年、福岡
② 『韓国美術五千年展』朝日新聞社、昭和51年、東京
佐賀県教育委員会、佐賀県立博物館『九州の原始文様』昭和52年、佐賀
③ 隈昭志・江本直『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告書第19集、昭和51年、熊本
④ 橋孝文「宇土市轟大字馬場に発見せる曽畑式土器」ともしび第5号、昭和41年、熊本
⑤ 佐藤仲二「私の考古学との出会い」とどろき第2号、昭和51年、熊本
⑥ 賀川光夫・内藤芳篤他『深堀遺跡』長崎県文化財調査報告書第5集、昭和41年、長崎
⑦ 小林久雄「阿高貝塚及御領貝塚の土器について」地歴研究第7篇3・4・5・6・8、昭和6年、熊本
小林久雄先生遺稿刊行会編『九州縄文土器の研究』所収、昭和42年、熊本
⑧ 平山修一「熊本県宇土市松山町山内遺跡の遺物」九州始原文化研究会会報2、昭和47年、福岡
⑨ 古田一英「不知火町の縄文文化」不知火町史、昭和47年、熊本
⑩ 島田貞彦「肥後国下益城郡当尾貝塚発掘報告」考古学雑誌12―8
『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部、昭和35年、京都
⑪ 小林久雄「九州の縄文土器」人類学先史学講座第11巻
註『九州縄文土器の研究』所収

⑫ 山崎純男「九州地方における貝塚研究の諸問題―特に自然遺物（貝類）について―」九州考古学の諸問題、昭和50年、東京
⑬ 江坂輝弥「８の＜１＞土器製作技術の変化」日本文化の起源、昭和42年、東京

(2) 弥 生 遺 跡

① 乙益重隆「地域的にみた肥後の弥生式遺跡―宇土半島及び八代平野」肥後上代文化史、昭和29年、熊本
② 富樫卯三郎『境目西原遺跡』宇土市教育委員会、昭和44年、熊本
③ 富樫卯三郎「宇土市境目出土の石戈」熊本史学第21・22号、昭和36年、熊本
④ 富樫卯三郎「甕棺とその遺跡」宇土市文化財集第一集、昭和47年
⑤ 杉原荘原『日本青銅器の研究』昭和47年、東京
⑥ 富樫卯三郎「ジョッキ形土器の１例―熊本県宇土市古城町12出土」古代学研究58、昭和45年、大阪
⑦ 古田一英「熊本県不知火町出町の弥生遺跡」熊本史学第26号、昭和39年、熊本

(3) 古 墳 遺 跡

① 宇土高校社会クラブ調査、乙益重隆・原口長之・上野辰男・佐藤伸二諸氏指導協力、昭和41年
② 浜田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後国宇土郡花園村の古墳」九州に於ける装飾ある古墳、大正８年、京都
③ 富樫卯三郎・卯野木盈二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」宇土半島の自然と文化、昭和50年、熊本
④ 前掲書註②「肥後国宇土郡緑川村の古墳」
⑤ 鏡山猛「装飾古墳と石人石馬」北九州の古代遺跡、昭和31年、東京
⑥ 富樫卯三郎、清見末喜「梅咲山古墳発見線刻の舟」考古学ジャーナル５、昭和43年、東京（咲は崎と訂正）
⑦ 三島格「熊本県宇土郡塚原古墳郡、熊本県宇土郡不知火町桂原古墳」日本考古学年報14、昭和36年、東京。同氏の説明・図版が『不知火町史』（昭和47年）にある。
⑧ 富樫卯三郎「宇土古城古墳」熊本の装飾古墳（松本雅明編著）昭和51年、熊本
⑨ 乙益重隆「装飾古墳と文様」古代史発掘８、昭和49年、東京
⑩ 乙益重隆『不知火町国越古墳』昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報、熊本県教育委員会、昭和42年、熊本
⑪ 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報―新発見の肥後最古の竪穴石室墳」熊本史学第30号、昭和40年、熊本
⑫ 乙益重隆「九州」新版考古学講座５昭和45年、東京
⑬ 熊本日日新聞主催、宇土市教育委員会協力迫ノ上古墳調査、昭和41年
⑭ 富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」宇土市文化財第一集、昭和47年、熊本
⑮ 熊本日日新聞社、宇土市教育委員会共催向野田古墳調査、昭和43年
⑯ 木下之治・小田富士雄「熊本山船型石棺墓」佐賀県文化財報告書第16集、昭和42年、佐賀
⑰ 九州大学文学部考古学研究室『福岡市老司古墳調査概報』、昭和44年、福岡
⑱ 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越出土の三角縁神獣鏡」熊本史学第33号、昭和42年、熊本
⑲ 前掲書註10
⑳ 富樫卯三郎「女夫塚古墳」前掲書註14

㉑ 熊本県教育委員会、昭和51年11月11日指定史跡
㉒ 梅原末治「宇土郡楯崎の古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第二冊、大正14年、熊本
㉓ 乙益・田辺・三島・田添「院塚古墳調査報告」熊本県文化財調査報告第6集、昭和40年、熊本
㉔ 小田富士雄「畿内型古墳の伝播」古代の日本3九州、角川書店、昭和45年、東京
㉕ 松本雅明「火君と大陸文化」古代文化VOL29、昭和52年、京都
㉖ 井上辰雄『火の国』学生社、昭和45年、東京
㉗ 前掲書註⑫
㉘ 前掲書註(2)の①
㉙ 座談会「朝鮮式山城をめぐって」日本のなかの朝鮮文化29号、昭和51年、京都
考古学座談会「邪馬台国を掘りあてる」別冊週間読売7月号、昭和50年、東京
森浩一教授発言による。
㉚ 松本雅明「古墳文化の成立と大陸」九州文化論集1古代アジアと九州、平凡社、昭和48年、東京
森浩一「自由な交流が古墳を生んだ」科学朝日2、昭和52年、東京

3　宇土周辺の中世城跡について

大　田　幸　博

踏　　査　　結　　果

はじめに

西岡台地は、中世に名和氏の居城となったという伝承があり、今回の記録保存のための発掘調査においても、宇土城に関連すると思われる種々の遺構や遺物が出土したほか、これと重複して古代遺跡が発見されたことは周知の通りである。

すなわち、この章では宇土城の性格を明らかにする資料として、宇土周辺に存在する中世城跡の中でも特に、名和氏に関連あると推察される田平・矢崎・木原・阿高・豊福の合計五つの城跡を取り上げ、順次、説明を行なっていきたい。

かかる意味において、中世のそれも名和氏の活躍した戦国時代の支配形態はいわゆる一円支配であって、中世早期の点の支配を脱しており、名和氏の本城であった西岡台地の宇土城も、時代こそ異なるものの、いくつかの周辺の支城を含めて、一つの勢力圏が構成されていたものと思われる。

すなわち、宇土城の性格を明らかにするには、是非とも、支城の調査が不可欠な事を意味しているのである。

この調査は、主として踏査により、遺構の現存状況把握等に重点をおいた。

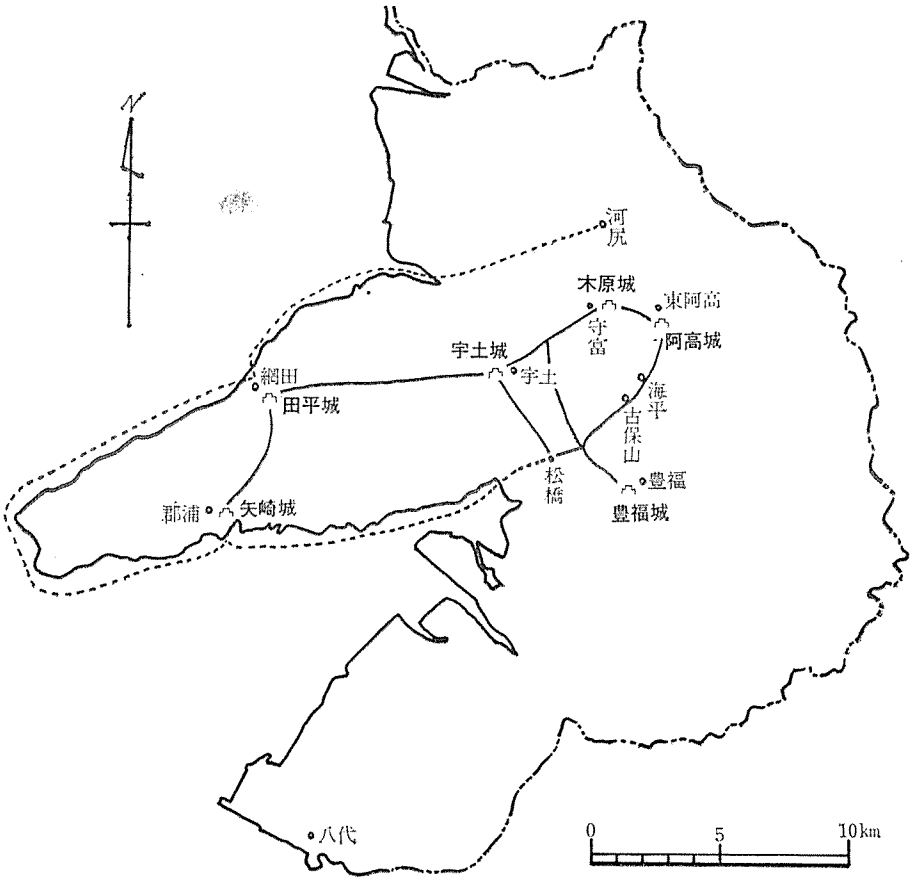
1.　宇土城とその出城の地理的位置について

宇　土　城	宇土半島のつけ根
田　平　城	宇土半島北側中央部
矢　崎　城	宇土半島南側
木　原　城	木原山の北側における尾根の末端部
阿　高　城	木原山の東北側における尾根の末端部
豊　福　城	木原山の南側における低丘陵地の末端部

なお、それぞれの城は下記の古道によって宇土城とつながる。

三　　角　　道	宇土城→田平城→矢崎城
木原道と木原山の山越えの道の併用	宇土城→木原城→阿高城→豊福城
薩　摩　街　道　（通　称）	宇土城→豊福城

この外に、田平城→矢崎城→豊福城は海上交通のつながりが考えられる。



第 1 図　　宇土城とその支城の位置図

2. 踏査による調査結果

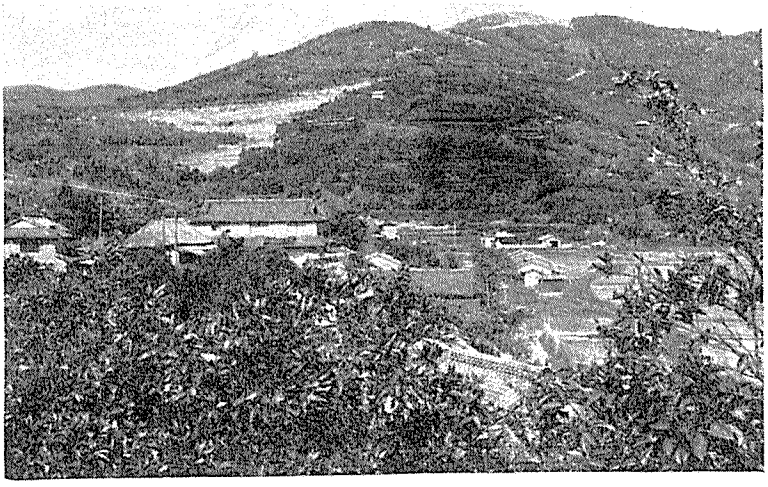
① 城跡名　田平城跡

種類	海城
地理的位置 (国土地理院発行地形図)	5万分の1　熊本8号 図幅南から10.6cm、西から0.9cm
所在地	宇土市上網田町字城(しろ)ほか
城跡の利用状況	ミカン園ほか
交通の便	国道57号線・宇土←→三角 産交バス・新地下車　東へ徒歩5分
備考	城跡は、網田・城古墳群内にある

1、城跡とその周辺の地形

背後には山地をひかえる田平の集落から南西方向の塩屋に向って帯状の丘陵地帯が伸びており、普通、地元の人は「堀の坂（俗称）」から塩屋までの丘陵地一帯を城跡と呼んでいるし、字図に「城」と記載されている。田平からの丘陵地は塩屋の手前で一旦切れており、現在は、この窪地を拡張して国道57号線と国鉄三角線が通っている。城跡の東・西両側は水田地帯であるが、これは近世における干拓の結果でそれ以前は明確に海であり、城跡ぎりぎりにまで海岸線がせまっていたと思われる。塩屋と城跡の間の窪地にまで海水が入りこんでいたかどうかは不明であるが、ともかく田平城は有明海に面した海城の部類に属することになる。城跡からは北東に山地、北西に海・南西に塩屋を望むことができる。

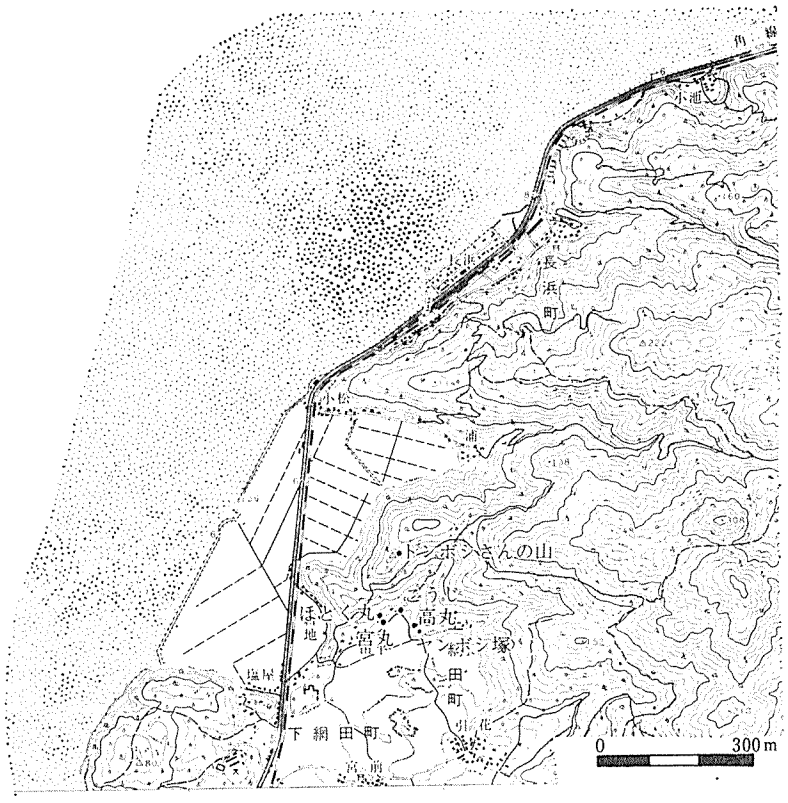
周辺の地形には居住可能で、堀切り2～3本で独立区画をなすことができるような所はなく、この田平の丘陵地がもっとも城を築くに適した場所であることがわかる。



1　田平城　城跡Ⅱ郭より田平の集落を望む

2、城跡における遺構の残存状況（縄張図参照）

「堀の坂」から南側一帯の丘陵が字「城」であり地元の人はここを「城跡」とよんでるが、調査の結果少なくとも軍事学的に言うところの城そのものは「ミョウジの坂」までの範囲にひろがるものと考えられる。



第２図　田平城位置図

(イ) 堀切りについて

・古墳北側堀切り

古墳が堀切りの壁面の役割を果たしている。すなわち古墳の周溝が考えられる位置に中世において城に関連した堀切りが設けられており、古墳がある部分においては土塁の役目をはたすことになる。

古墳時代の周溝跡と中世の城の堀切りが重なる例は、宇土城における千畳敷下の発掘事例と同様で、興味深い。

他の同事例としては、飽託郡北部町和泉字崩の平に所在する赤水城にみられる。

遺構が顕著に残るのは丘陵西側斜面で、これは、以前通路として利用されていたらし

い。

東側斜面も「堀」という呼び名があるが、今は斜面を削除して人家が建っている。なお堀切りの平坦面は堀幅10ｍを示し、開墾前は堀底に小規模な塚があったという。

※堀の坂

丘陵地を東西に切断して深さ５ｍ程に掘り下げ、現在、塩屋方面から田平の集落に至るもっとも一般的な道路となっている。底幅も７～８ｍあるが、この堀は道路整備の時に大分、幅も深さも拡張されている。

※ミョウジの坂

ここも形の上からは丘陵地を東西に切断した格好になっているが、堀の南壁は高さ2.5ｍあるものの北側は集落とほとんど高低差はない。現在は山に至る新道付設の為に堀幅が拡張されている。城跡関連遺構としての堀幅は、４ｍ程であろうと思われる。字図にも道路拡張以前の堀幅を示す図が記せられている。堀切りの東西両端はいずれも古道となって、丘陵下に通じている。

(ロ) 郭について

古墳北側堀切りから、塩屋までの南側一帯の丘陵をⅠ郭、北側の堀の坂までをⅡ郭、更に堀の坂からミョウジの坂までをⅢ郭とする。

※Ⅰ郭

長さ270ｍ程にも及び、多少の段差をもった広い平坦面で、城跡南端際に２本の堀と、その周囲に20ｍ×30ｍの高台がある外は、遺構は観察できない。

※Ⅱ郭

長さ50ｍ程でⅠ郭からⅢ郭までの中では面積がもっとも小規模である。

ここには以前、人家が２戸ほどあった。「貝殻」が散乱しており、人骨も出土している。

※Ⅲ郭

郭の半ば程を南北に走る古道がある。郭は一様に平坦面ではなく、西から東へ順次４つの階段状の地形となっており、西側から古道までの二段の平場をしんじようとよぶ。西寄りの平場には小規模の高台があり、ここには以前、古墓が５～６基あったという。

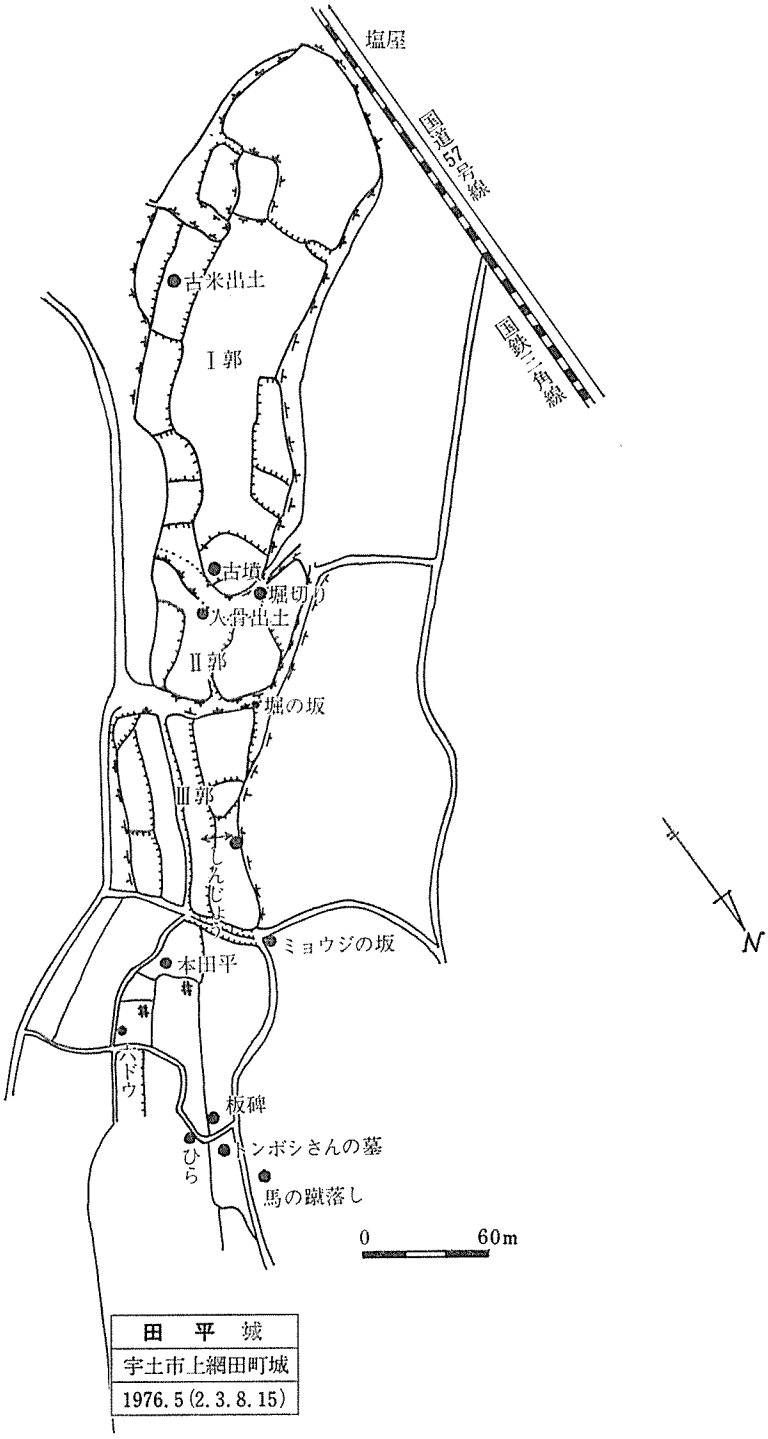
3、集落の様子

(イ) 城跡関連地名

※宮丸→田平の集落でもかなり奥まった北端部にあり、現在は民家の敷地・畑地となっているが、石組みの排水溝や直径90cmの古井戸（石組み）（田平3193番）がある。

※ほとく丸→宮丸の上段の平場で、今は畑地となっている。

※こじんヤボ→宮丸とほとく丸の間の藪（やぶ）をいう。こじんは荒神の意味であろうか。


塩屋
国鉄15号線
国鉄三河線
古米出土
Ⅰ郭
古墳
堀切
人骨出土
Ⅱ郭
堀の坂
Ⅲ郭
しんじょう
ミョウジの坂
本田平
ハドウ
板碑
ひら
ンボシさんの墓
馬の蹴落し
0
60m
N
田　平　城
宇土市上網田町城
1976.5(2.3.8.15)

第 3 図　縄　張　図

※高丸→城跡が存在す帯状の丘陵地と背後の山のつけ根にあたり、田平の集落とは少々離れている。

ヤンボシ塚と隣接する。

※田平の三丸→住民は、ほとく丸・宮丸・高丸の三つを総称して、このように呼んでいる。

※こうじ→高丸と宮丸との間の集落を称する。

※本田平→字田平でも特にミョウジの坂から北側へ35m程の一隅を称する。

※六ドウ→本田平の北端にあり東西南北・四方を古道で囲まれており、最近、この地の南西隅から土地の所有者が直径120cm深さ100cmの古井戸（石組み）を発見している。

※ひら→六ドウから、トンボシサンの墓に至る古道沿いに一隅の平場があり、民家が一軒建っている。ここをかように称する。

(ロ) 古道

古道が田平の集落を網の目のように走っていることがわかる。現在、使用されている道とは多少異なっている。

古道にまつわる話としてはトンボシさん付近では勾配が急で馬がよくすべり落ちたという。このため、この箇所には「馬の蹴おとし」という名がついている。

なお、古道沿いには2本の大きなムクの木があったというが、今は一本しか現存していない。

(ハ) 古井戸

六ドウと宮丸に古井戸が残っている。六ドウ西上の平場の一隅には田平でもっとも深いといわれた古井戸があったというが、今では埋められている。

4、遺物

城跡内はミカン畑に利用され表採遺物は極めて少ない。わずかに中世雑器一片。

※古米

7～8年前に城跡の南、地下1.5mから出土、モミの状態であったという。

帯状に、深さ20～30cm程堆積し、平場を東西に走っていたらしい。

地元の人は米蔵の跡ではないかとうわさし合った。

※人骨

Ⅱ郭からバラバラになった人骨を1個の壺にあつめたものが出土した。（昭和51、5、3）

壺は近世のもので、おそらくミカン畑に開墾の折出土した人骨を集めたものであろう。

※つり鐘

城内より出土し、戦時中まで現存していた。かなり使用した痕跡があり、銘もはいっていたらしい。音色(ねいろ)がよく村の寄合の合図に使われていた。高さ30cm前後。

※刀

伝承のみ。古老の記憶によれば、城内よりさびついたものが出土しているらしい。出土時期不明。

※石うす

ミカン畑の石垣に一部使用されており、城跡内より出土したものという。

5、集落内の遺跡について

※トンボシさんの墓

古道、馬の蹴おとし付近に墓地があり、五輪塔等が散在する。その中に、戦国から江戸初期にかけてのものとみられる立派な2基の墓があり、城主とその奥方のものと伝わる。

※トンボシサンの山

三角点（標高91.6m）がある周辺の山地は殿様の持ち山と伝わっており、三角点付近に瓦質の小さな社(やしろ)が祭られており「山の神」と呼ばれている。社には□村役人と記され宝暦2年（1752年）の年号も読める。

字図には山上(やまのかみ)となっているようである。

※板碑

松翁栄仙の銘があり、トンボシサンの墓付近の観音堂（近世）敷地内に建っている。

※ヤンボシ塚

高丸の上段にある塚で、円墳である。

6、城跡周辺について

田平の丘陵地の東側にあたる「引の花」の集落には、殿尾とよばれる箇所があり、周辺には、宝篋印塔や高さ2mを越す五輪塔等がある。

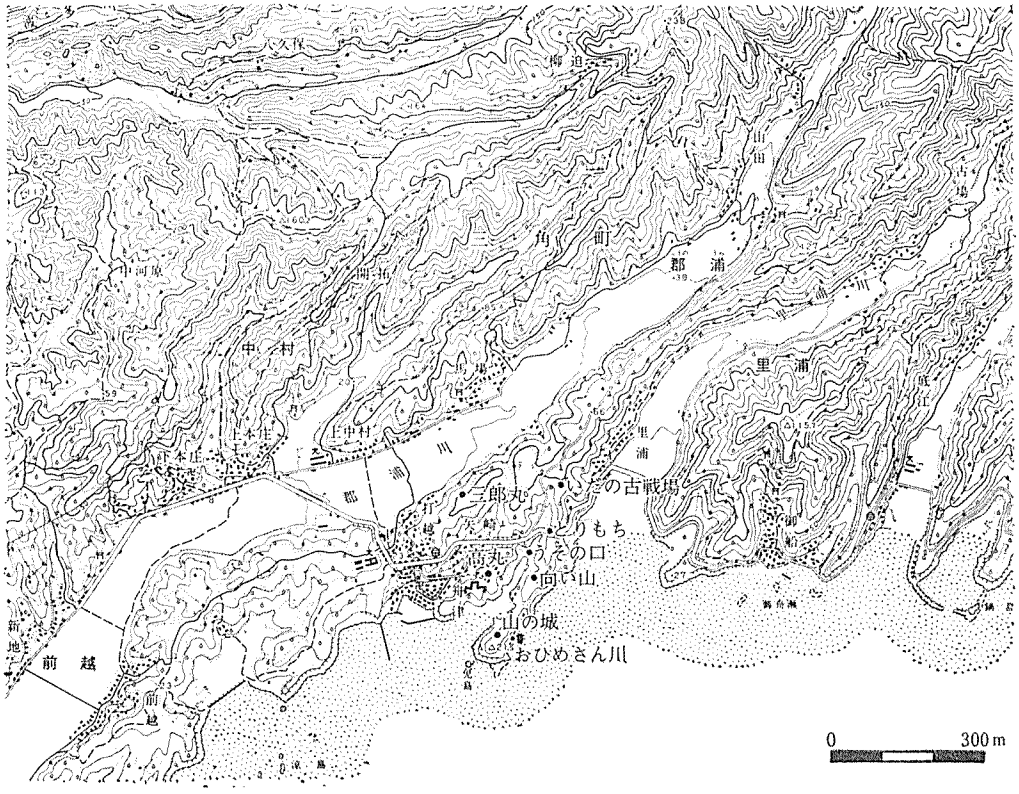
② 城跡名　矢崎城跡

種類	海城
地理的位置 （国土地理院発行地形図）	5万分の1、八代5号 図幅北から10.7cm、西から6.7cm
所在地	宇土郡三角町大字郡浦字矢崎（やざき） （宇土半島の南側・海岸線沿い）
城跡の利用状況	ミカン園・畑地・雑木林 （概して荒地が多い）
交通の便	県道松橋三角線 産交バス矢崎下車南へ4～5分

1、城跡とその周辺の地形

海に突き出た細長い丘陵を2本の堀切りで切断して大きく二つの郭に分けており、ここを地元の人は城跡（しろあと）と呼んでいる。

城跡の背後には、矢崎の集落があり、ここにも自然谷を多分に利用したと思われる堀切り



第4図　矢崎城位置図

がある。

城跡の東側は、入り江をはさんで「山の城」と呼ばれる丘陵が城跡に平行して走っており、更に丘陵突端には、墓所を持つ児島という極小の島が顔を覗かせている。

一方、西側はこれ又、昔は入り江だったと思われる船津を挾んで、その一部に三郎丸という字を残す丘陵地帯が、やはり城跡と平行して走る。海抜高度は、三郎丸・城山・山の城の順に低くなる。

2、城跡における遺構の残存状況（縄張り図参照）

東西に走る2本の堀切りを遺構の説明上、南から北へ順次、1号堀切り、2号堀切りと呼ぶことにし、1号堀切りから南側へ城跡突端までをⅠ郭・2号堀切りまでの南側をⅡ郭とする。

(イ) 堀切りについて

※1号堀切り

Ⅰ郭とⅡ郭を繋ぐ土橋がある。遺構は土橋より東側部分がよく残っている。

西側部分は畑地への開墾によって、北側壁面が削除され、15m程しか残っていないが、以前は50m以上の長さが観察できたという。

堀底幅は7～8mである。

2 矢 崎 城

○2号堀切りを県道より望む（堀の左側→高丸）

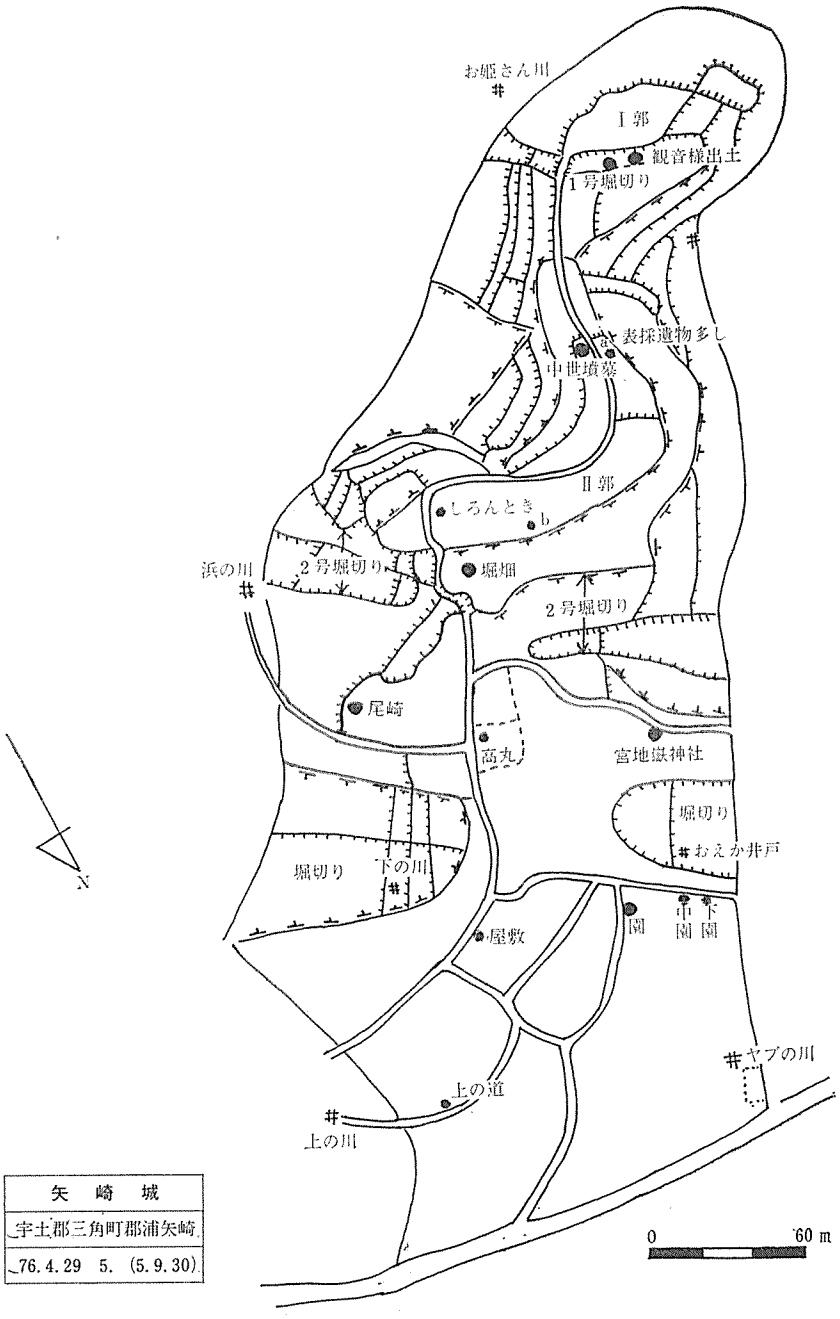
○集落→船津

尚、この堀切りの開墾の際に堀底部分あたりから小型の観音様が出土している。

※2号堀切り

城跡を船津よりの県道から眺めた場合、その存在をはっきりと観察できる程の規模である。堀幅は東西とも30mにも及んでいるが、遺構の特色として注目に値するものは、堀壁が非常に急勾配をなしており、ほぼ垂直に近い。これは1号堀切りにも言えることであるが、2号堀切りの方がかなり顕著である。

次に堀底のことであるが、東西何れも2段構えになっており、東側部分は堀幅8m～25m・長さ75m、西側部分は堀幅13m～20m・長さ60m以上の堀が重複している。堀の造りは、前者が人工的色彩が強く、後者は自然の迫地に手を入れたもののようである。



矢　崎　城
宇土郡三角町郡浦矢崎
76.4.29　5.（5.9.30）

第5図　縄　張　図

東西の堀切りは城跡の背地を鉤型に削除した幅5m弱の溝で繋がっている、この部分は後世の遺構のようにも思える。不整形な壁面と狭い堀幅からして疑問が残る。

(ロ) 郭について

※Ⅰ郭

現在ミカン畑となっている一区画だけが、ほぼ平坦面で他は平場とはいっても傾斜地が多い。遺構は何も観察できないが、江戸末期にはこの郭に郡浦上番所小屋があったという。

水源としては中川儀一宅の古井戸からの古道が通じているし、東側崖下には湧水地「おひめさん川」がある。

※Ⅱ郭

2号堀切りからⅠ郭に至る小道を境に西側に平場がひらけ、東側は大きな迫になる。現在は墓地・ミカン畑・雑木林・畑地等に利用されている。

この郭には中世墳墓が存在し、表採遺物が非常に多い平場もあり、生活圏を推察できる。地名に「しろんとき」「堀畑」と呼ばれる箇所があるが、前者は「城の峠」の意をなし、後者は、その平場に堀の存在を意味するものであろうか。但し、地形からすれば、堀畑に堀が存在するとは考えにくい。崖下にあたる2号堀切りからその名がついたとも考えられる。

3、集落の様子

(イ) 城跡関連地名

※高丸→2号堀切りのすぐ北側に位置し矢崎615～616番にあたる。矢崎の集落で最も高い所にある。

※屋敷→矢崎657、665～667番にあたり、屋敷の西側は崖になり、一段低くなった所を城への道が通っている。西側の崖の壁面には幅5.9mの溝状のセクションが現われている。

※園(その)→矢崎656、659、661番にあたり、関連地名として、中園（矢崎655）。下園（矢崎637）がある。

(ロ) 堀切り

東西側とも堀底の先端近くでも35～40m以上あり、自然の迫をある程度利用したものらしい。西側に「おえか井戸」、東側には「下(した)の川」の古井戸がある。

この堀切りを境に南側に高丸、北側に屋敷、園が存在する。

西側の堀底はゲート・ボール場になっているが、以前は深さ3m程の窪地をなしていた。

(ハ) 矢竹の群生

集落内には矢竹が多い。矢崎の周辺に、城よりの矢を受けとめたという所があり、この伝承とあわせて考えてみると興味深い。

(二) 古井戸

多くの古井戸が残っており、集落内や城跡内の生活を知るうえにおいて極めて貴重な資料になり得るものと考えられる。古井戸の形態については、下記のとおりである。

第1表 矢崎城古井戸一覧表

名称	形式	直径	深さ	備考
ヤブの川	円形 石組み	92cm× 96cm	6～7 m	矢崎650番 寺尾俊定敷地内
上の川	同上	100cm×100cm	1.7m	上の道という水汲み道あり
浜の川	同上	同上	1.5m	
お姫さん川	(湧水地)			海岸の砂浜
	方形 石組み	80cm×160m	1.8m	崖下に井戸があり崖をつたって湧水が流れ込む 中川儀一地内
下の川				集落内の堀底にあった。 (50年前に埋没)
おえか井戸				ゲートボール場附近にあった (埋没)

古井戸はいずれも丘陵地麓の湧水を利用したものであり、年中、涸れることはないという。概して井戸の水深は浅い。

4 遺物

※a地点(縄張り図参照)における表採遺物→城跡における最も多くの遺物を表採できる所で現在は畑地である。主なるものには青磁片、中世雑器片・漁業用石錘・土錘等があげられる。

※観音様→第1号堀切り西側部分を畑地に開墾中に出土、しばらくは社に祭っていたらしいが、所有者が米国に移住した後はその所在が不明。

※小柄(こづか)→第Ⅱ郭より出土、柄の部分は残っている。菱形を2つ重ねた紋が取つ手についており、以前は銀箔がなされていた。(元田氏保管)

※宝篋印塔相輪部分と五輪塔

→b地点の地下式土擴から農耕中に出土。現在は「屋敷」そばの矢元家に安置されている。(出土は明治初期)

※人骨→尾崎と宮地嶽神社付近から、戦時中の防空壕付設のおりに多量出土・宮地嶽神社の建立理由はここからきている。尾崎からの出土人骨は粉状に風化していたという。

5　その他の遺構について

※中世墳墓→高さ1.5m、規模は10m×10m程の方形をなしていたように思えるが、現在は削除されて不整形を示す。マウンド上には朽ちながらもハゼの木が根をはり、石碑（銘はない）も立っている。

※地下式土壙→農耕中に急に窪みがあらわれることがある。

城跡や集落内には地下式土壙が存在していることがはっきりしている。今までに確認されているものは合計4つである。

6、伝承について

※矢崎城は難攻不落の城であった。

※激しい戦いが行われた。（戦時中における人骨出土は、その戦いを裏付けるものであると地元の人は考えている。）

※戦時になると何度も農民が藁を燃して、熱いままのうちに灰を堀に入れた。そうすれば敵が堀を伝ってくるのを防ぐことができたという。

※丘陵を下から登ってくる敵を防ぐために木を伐り倒して、切り口を上に向けて並べたという。

※明治において、城跡を畑地に開墾のおり、焼米・陶器片等が多量に出土したという。

※先述の1郭における番所小屋で寝泊りすると、翌朝には必ず身体が一転していたというが、城跡内の出来事であるため、地元の人には強い印象として残り、今なお語りつがれている。

7、城跡周辺について

※三郎丸…城跡の西側を平行に走る丘陵地の南端部分についた字名で堀切り状の溝を挟んで、北側を迫平という。更に、三郎丸と迫平の間の東側丘陵斜面は自然の谷を利用したと思われる堀状の窪地がある。現在この地は納骨堂敷地になっている。

※山の城……三郎丸と同様で、城跡の東側を走る丘陵地の南側部分についた小名で、堀切り状の迫を挟んで、北側を「向い山」と呼ぶ。

「山の城」は、戦前、矢崎公園として地元民に親しまれた所である。丘陵の中央部分を道路が走っている。遺構は何も観察できないが、丘陵東下の海辺に「おひめさん川」という湧水地がある。

なお、向い山の北方に、琵琶歌に謡われた「いだの古戦場」がある。

※児島……別称、弁天島で、弁天サンの石碑と、河野市之助の墓があるが、明治期のもの

である。

※とりもち……城跡を含む矢崎の丘陵地北端部の一隅を称する。

県道に接する丘陵地のくびれにあたる。

※うその口……城跡と山の城の丘陵地間の迫をいう。語源には、「磯の口」からと、「うそ鳥の口ばしの形状」からの2説がある。

(3) 城跡名　木原城跡

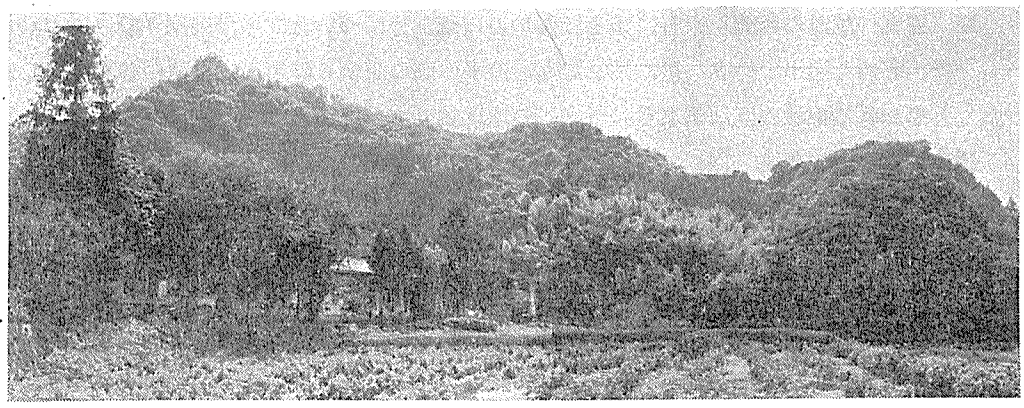
種類	山城
地理的位置 (国土地理院発行地形図)	5万分の1　熊本8号 図幅南から6.5cm東から8.9cm
所在地	下益城郡富合町大字木原字城山(じょうやま)
城跡の利用状況	城山の頂周辺・尾根続きの平場はほとんど雑木林であり、一方窪地は木原不動奥の院となっている
交通の便	県道　宇土甲佐線 熊本バス……城南廻り、木原下車、南へ徒歩20～25分

1、城跡とその周辺の地形

木原不動尊堂から南へ小路を進んでいくと、ほどなく三差路があって直進すれば六殿宮へ、西に折れれば木原城跡を意味する城山への登り口へ通じる。

城山の山道を登ること12～15分程で頂に至る。現在ここは、木原不動尊奥の院となり、御堂がおかれ、信者の参詣が多い。

かっては城山の中心部であったろうと思われる。



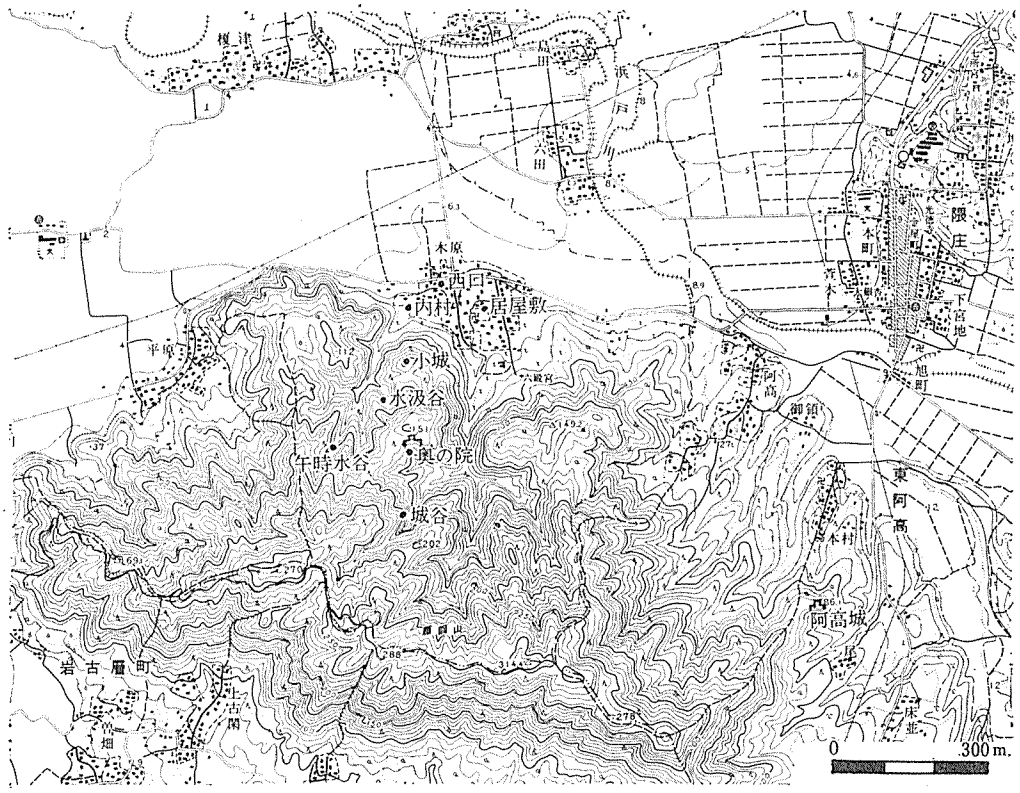
3　木原城　六殿神社馬場小路より望む　左端の頂き→城跡　右端の頂き→小城

奥の院の場所は、尾根が南東側を除く三方を取囲み、重ねてその南東側部分にも小山が存在していることから、完全に擂鉢状の形態をなす。このため、城山の麓からは、この地の存在をまったくうかがい知ることは出来ない。

城山の遺構としては、この擂鉢状の平場をはじめとして、周囲の尾根や小山に削除による平場が幾つもある外、堀切りも存在する。

字名には水汲谷（みずくみたに）・城谷（じょうたに）・小城（こじょう）等があり城山とその周辺は城としての要素を強く残す。

城に伴なう集落の大字木原には、居屋敷・内村等の城跡関連字名が含まれる。



第６図　木原城位置図

２、城跡における遺構の残存状況（縄張り図参照）

※奥の院（擂鉢状の平場）

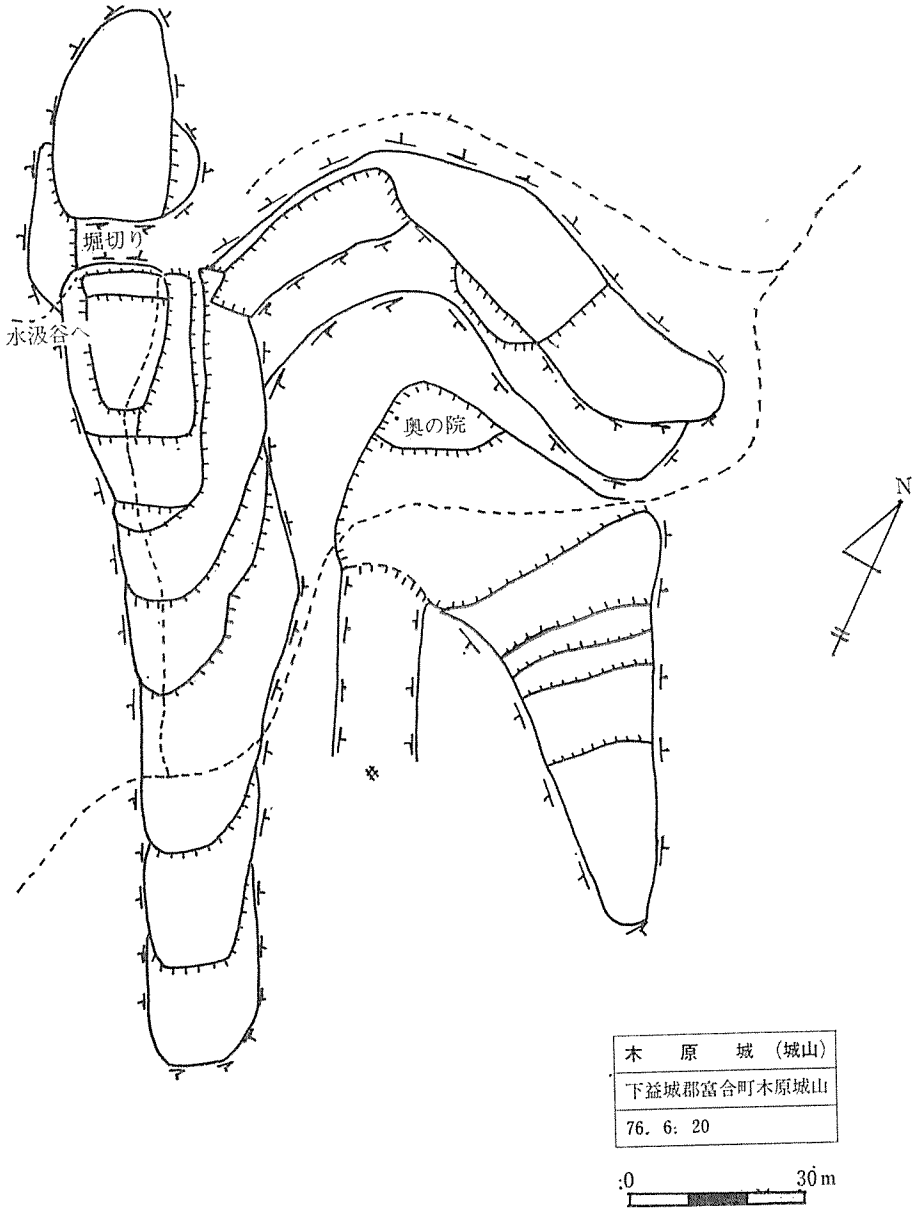
現在、その一隅に阿弥陀堂があり、円福寺にあった５体の仏像がまつられている。

窪地の底は南北30ｍ弱・東西40ｍ強の平坦地である。ところで、窪地の南西隅は開いており、幅15ｍ・長さ34ｍの溝が谷に向って走る。奥の院の地が特殊なだけに、存在価値は大きい。まさに自然の排水路をなしている。ある程度、人為的なものであろうか。この溝の南端近くに古井戸がある。うつそうと茂る樹木の為に奥の院一帯は日陰となり、平坦地は

全面コケむして静かなたたずまいを呈する。

青磁片や中世雑器片等もこの地から表採され、当時の城のようすをしのぶことができる。

※奥の院・西側に連なる尾根



第 7 図　縄　張　図

尾根の背は削除による平坦面が多い。7段ばかりの平場が連続しており、平場には水汲谷への古道がある。なお、この尾根の北端には堀切りがあり、対岸には20m×30mの独立した平場が存在している。

※奥の院、北側の尾根

御堂の背後にあたり、尾根をえぐり取るようにして細長い通路を設け、東側寄りの2段からなる平易に通じる。

この平場からは、城跡北側一帯を望むことが出来る。

※奥の院、南東側の小山

あたかも古墳のような状態で、窪地に存在し、小山の背は削除されて2つの大きな平場となる。

この小山が、城山麓から見た場合奥の院の所在を隠す。

※堀切り

幅8m・長さ15m程で堀底は東方向で自然の迫へ、西側で曲輪に繋がる。この堀切りをはさんで存在する二つの平場が最も人為的に加工されている。

3、水について

※古井戸

現存の井戸は、後世に掘り直されたものである。下益城郡村誌に「古井ノ跡四五十年前迄ハ顕然タリシカ大木倒レ井ヲ崩シタル由ニテ今ハ纔(わずか)ノ水溜トナレリ」という記事が見える。

※水汲谷

城山の頂から見て、北西下にあたる谷間は水汲谷と呼ばれ、岩清水が流れている。字名からして、この水が城の飲料に使用されていたことは疑いないものであろう。

※午時水谷(ごすいたに)

城山の頂から南西下の谷間の一隅を称す。別に谷川が流れているわけではないが、この付近は一種の湧水地であり、常に谷の壁面は湿気に富み、飲料にも適する。これ又、水汲谷と同様の役目をはたしたものと思われる。

午時水谷の由来は、ちょうど昼頃にこの谷間に日光がさし込み、湿地に反射して白く光る事から来ている。かって、麓の住民はこの光りを見て正午を知ったという。

4、城跡関連字名

※小城(こじょう)

城山から続く段落ちの尾根の突端部についた字名である。現在はミカン園となり、麓には、字内村が存在する。尾根の突端部分は三つの平場に分かれ、東端には腰曲輪も見られる。尾根はここだけが平坦で、他はくびれて極端に狭い。背は20mにも満たない。平場と

背のつけ根の部分には幅13mの堀切りが設けられている。

小城からの眺めは絶景である。

5、集落のようす

(イ) 城跡関連字名

※居屋敷

木原不動尊堂を含む周辺一帯をいう。桑畑や農家の庭先には、須恵器、土師質土器、中世雑器等の散在が見られる。

※内村

小城の麓にあたり、南側は桑畑・北側は集落となっている。桑畑からは、石器から中世雑器に至るまでの多種の遺物を表採できる。

内村は北と西は段落ち、東は水路で一つの区画をなす。

※長泉

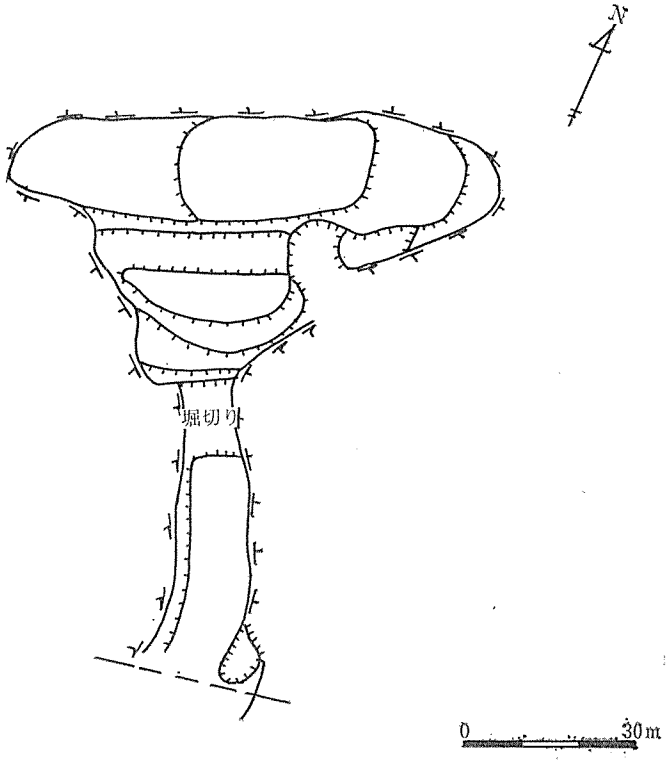
ここには木原家の菩提寺として栄えた長泉寺があったという。谷間にかけて五輪塔等がある。

(ロ) 大字木原内の小路

木原の集落は、南北方向へ直線に近い小路が走っている。木原不動尊堂前を通る河原小路、六殿宮へ通じる馬場小路である。

(ハ) 不動池と馬場池

両池からの水路が集落内を走る。あたかも水濠の様子を呈する。



木 原 城 (小城周辺)
下益城郡富合町木原小城
76. 6. 20

第 8 図　縄　張　図

6　遺物

※青磁片

奥の院の平場と犀川池に至る山道から表採。良質のものである。

※擂鉢

奥の院の平場より底部を表採。

※その他

居屋敷と内村には、石器・須恵器・土師質土器・中世雑器の表採多し。

7、伝承

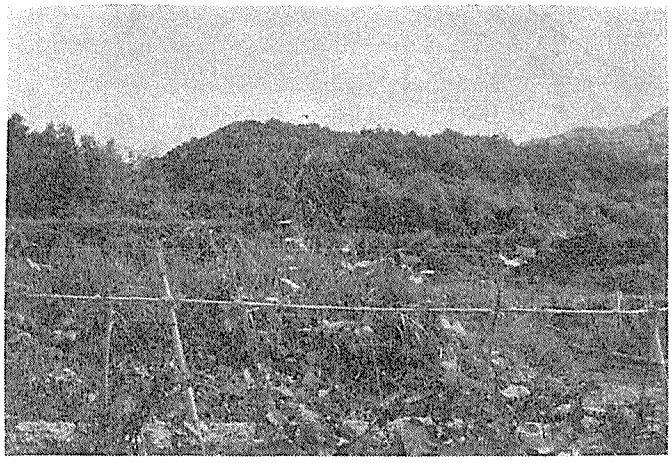
・木原山には古くから鎮西八郎為朝の伝説があり、木原城も為朝の城跡という。

当時は為朝の剛弓におそれをなして雁が列を乱したと伝えられている。

現在、長泉寺跡には為朝塚とよばれる板碑がある。さらに、木原山の山中に鬼の岩屋というところがあり為朝が、在城の時、兵糧を蓄納した所と言われる。

④ 城跡名　阿高城跡

種類	山城
地理的位置 (国土地理院発行地形図)	5万分の1　熊本8号 図幅南から4.5cm　東から5.1cm
所在地	下益城郡城南町東阿高字城山(じょうやま)
城跡の利用状況	雑木林
交通の便	県道　熊本松橋線 熊本バス　東阿高下車

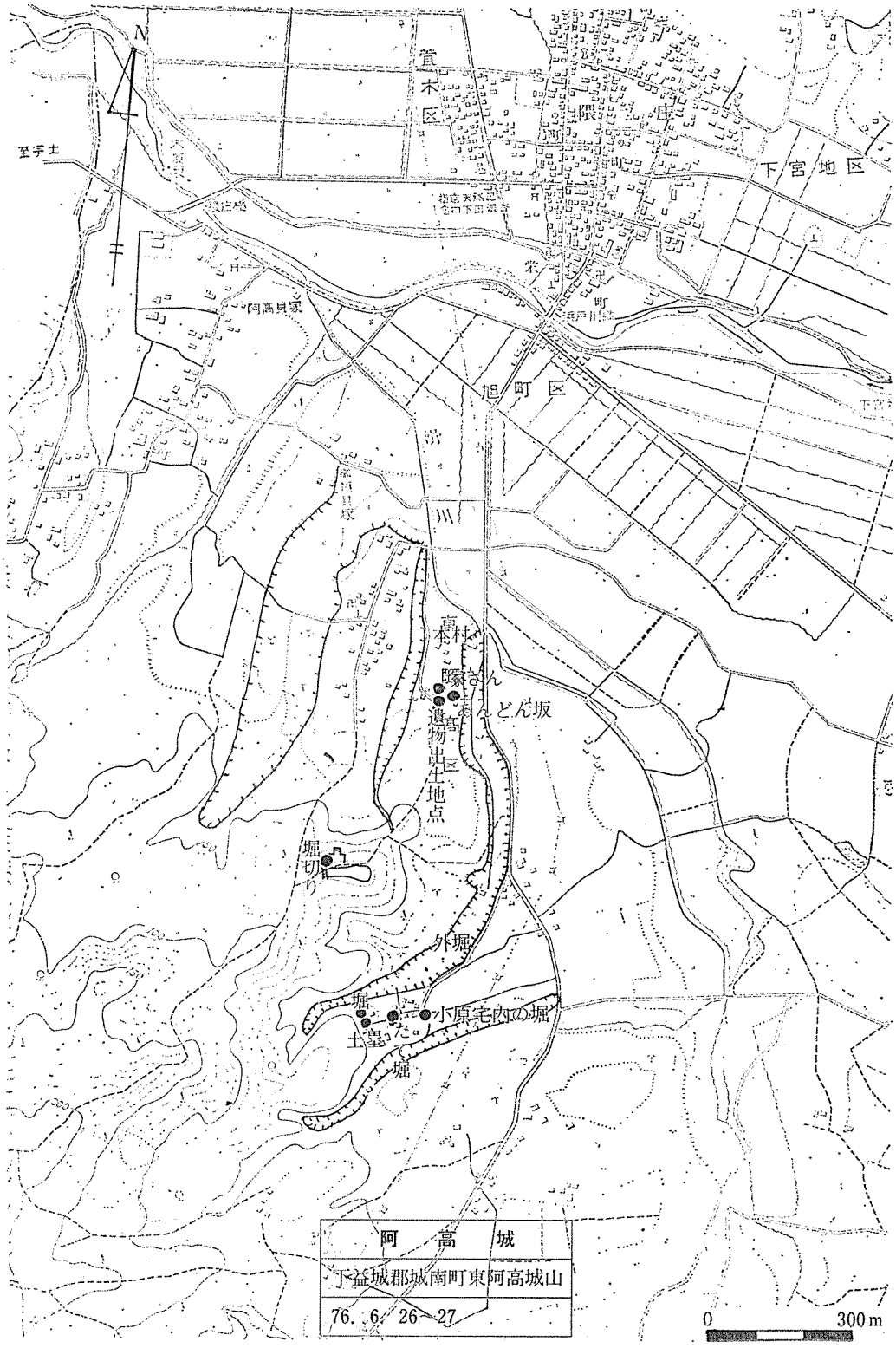


4　阿　高　城　(東阿高より望む)

1、城跡とその周辺の地形

堀切りで切断された木原山の尾根の一郭を城山といい、別称「いちの字山」という。別称のごとく城跡は「一の字」をした帯状の地形である。

城山の背からは、隈庄城跡や浜戸川沿岸を一望することができ、麓には東阿高の本村、字南飛尾


N
至宇土
貢木区
下宮地区
栄町
旭町区
阿高貝塚
本村
遺物出土地点
ぐんどん坂
堀切り
外堀
堀
土塁
小原宅内の堀
阿高城
下益城郡城南町東阿高城山
76. 6. 26～27
0
300m

第 9 図　阿高城縄張図

・字一尾（いちのお）等の集落が存在している。

城跡は、地形的にも、遺構の残存状況からしても、典型的な砦の一種であろうと思われる。ところで城と集落の結びを考えた場合、中世的遺構を残す一の尾や東阿高の本村等が考えられるが、いずれも積極的なものではないようである。

2、城跡における遺構の残存状況

※本丸跡

木原山における台形状の尾根筋を堀切りで切断し、東西から北東方向へ長さ90～100 m前後の独立区画を造っており、ここが本丸跡と思われる。本丸跡は幅20 m前後の平坦面をなしている外は遺構は何も観察できない。（本丸内に多角点がある。）

※堀切り

阿高城跡における唯一のはっきりした遺構で堀幅は9～10 mで深さは南西側壁で2.5 mを示す。

※竪堀り

本丸から本村に至る途中の山道沿いに自然谷がほぼ垂直に走り、迫の湿地帯へ連なる。谷は上場で7.5 m、下場で15 mの底幅を示す。形から見ても十分に竪堀の役割をはたしたものと思える。谷底も若干、加工されているようである。

3、集落の様子

城山の麓、北東側を走る幅30 m程の自然谷を地元の人は外堀と呼びこの外堀をはさんで東阿高の本村と一尾が存在する。

(イ) 一尾について

※集落からみて上段にあたる畑地を字では城山と呼んでいるが、昭和49年に全面宅地造成が行われた為に、今ではそのおもかげはない。この城山の畑地跡と一尾の集落が接する所に中世的遺構が観察される。

なお、畑地跡からは縄文土器片を数片表採した。

※堀

城山の畑地跡から集落内部に向って14 mの地点に幅5 mのかぎ形の溝が造られている。長さは南北に18.5 m、東西31 mであり、遺構は南北部分がよく残っている。

※土塁

高さ1.5 mで農家の庭先にあり東西に走る。

※竪堀り

集落西端斜面に迫へ向って、かなりの急傾斜で造られている。

迫に谷川が流れている為に、一昔前までは村人の洗濯通路になっていた所である。

※小原宅内の堀

小原宅の東端を南北に走り、以前はある程度の深さをもっていたが、ゴミ捨て場等に使用された関係で、かなり浅くなったという。

それでも地表面から2.5m程の深さがある。長さ48m、幅10m

(ロ) 東阿高の本村について

目立った遺構はないが、塚さんという小名の地に中世墳墓の存在があった。

なお外堀に下る堀道があり、これをあんどん坂という。

なお、一尾の遺構にはまったく阿高城に関する伝承はないが、本村の塚さん付近は、阿高城の武士が住んでいたという話しが伝わっている。

4、表採遺物

※土なべ・すり鉢。

先述の塚さん付近の排土（深さ1.5～2mからのもの）中から出土した。

⑤ 城跡名　豊福城跡

種類	丘城
地理的位置	5万分の1八代5号 図幅北から8.5cm、東から8,1cm
所在地	下益城郡松橋町豊福字下城（しもしろ）～上城（かみしろ）
城跡の利用状況	ゲートボール場、畑地 水田　ミカン畑
交通の便	国道三号線 産交バス…宮原→熊本 豊福下車東へ徒歩3分

1、城跡とその周辺の地形

北、小丘陵の裾部が南にのびた末端の一部を切断して楕円形状の独立丘となし、更にこれを再度堀でもって切断し、大きく二つの郭に分けている。

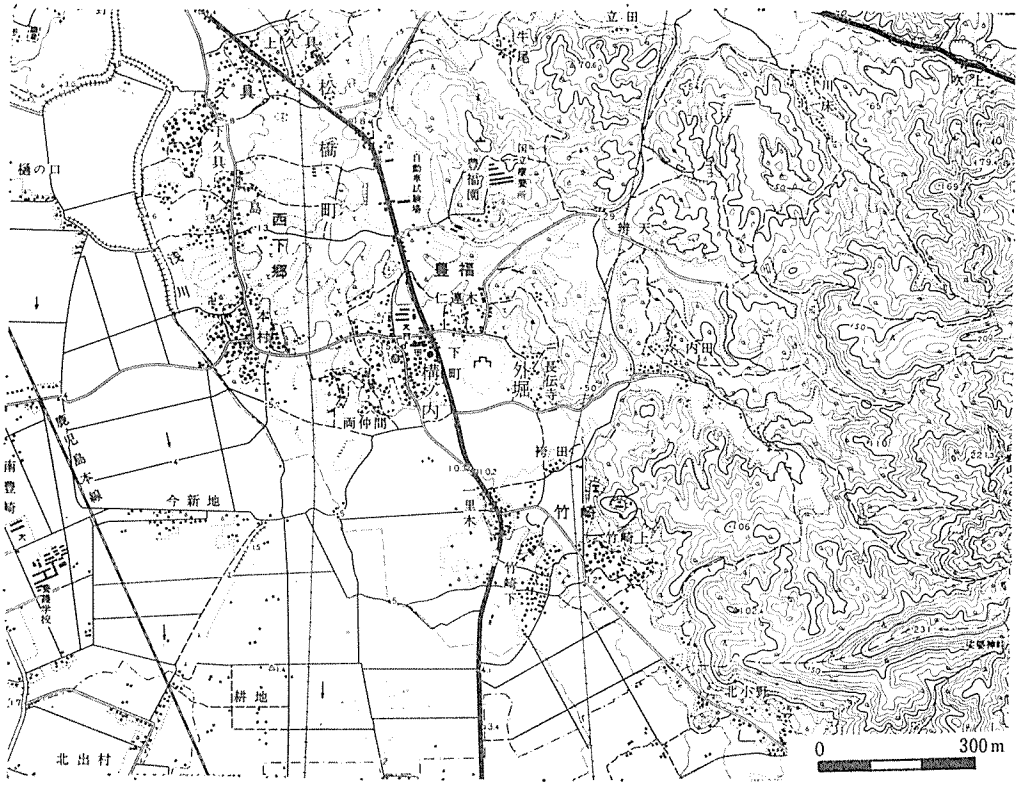
現在、城跡の周囲は水田となって城跡だけが微高地となり水田面から顔を覗かせる。

水田を挟んで南は竹崎地区、西は下町の集落、東は竹崎城跡を含む一連の高地となる。

尚、城跡南側の水田地帯には東西に堀切りの役目を果たす浅川が走り、西側は城存在当時、今よりもかなり城付近まで海岸線が入り込んでいたらしい。尚、城跡から南方向の高地に竹崎城跡が望まれる。

2、城跡における遺構の残存状況（縄張り図参照）

遺構の説明上、現在ゲートボール場になっている本丸部分を中心に南側の平場を含めて主郭、内堀を挟んで北側一帯の平場を外郭とし、外郭をとり囲む水田を外堀とする。

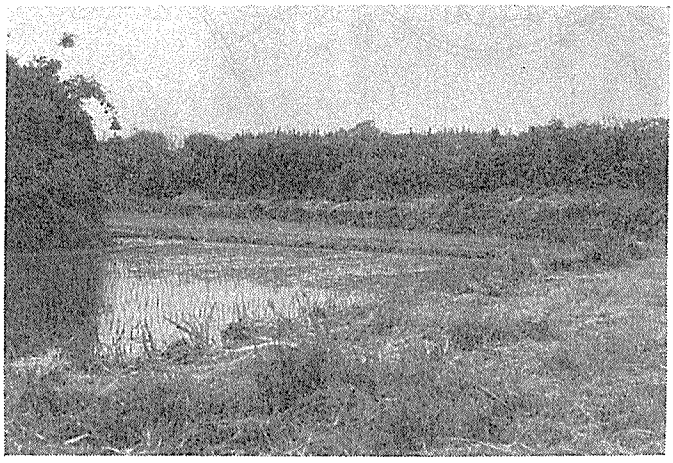


第10図　豊福城位置図

※主郭

城跡において最も高い位置にあり、東西48ｍ南北26ｍの長方形をなす高台で今はゲートボール場になっている。以前はこの高台は、二段の平場にわかれていたが、ゲートボール場ができる時に削られて段差はなくなった。今では東側部分がコンタの上で高いだけである。ここが本丸跡と呼ばれる。

この本丸から南側へ、5～6ｍ下って大手口を伴う東西、南北とも幅50ｍ程の出丸と更にそれより0.7ｍ下って東側に南北50ｍ、東西30ｍの瓢箪状の平場がある。



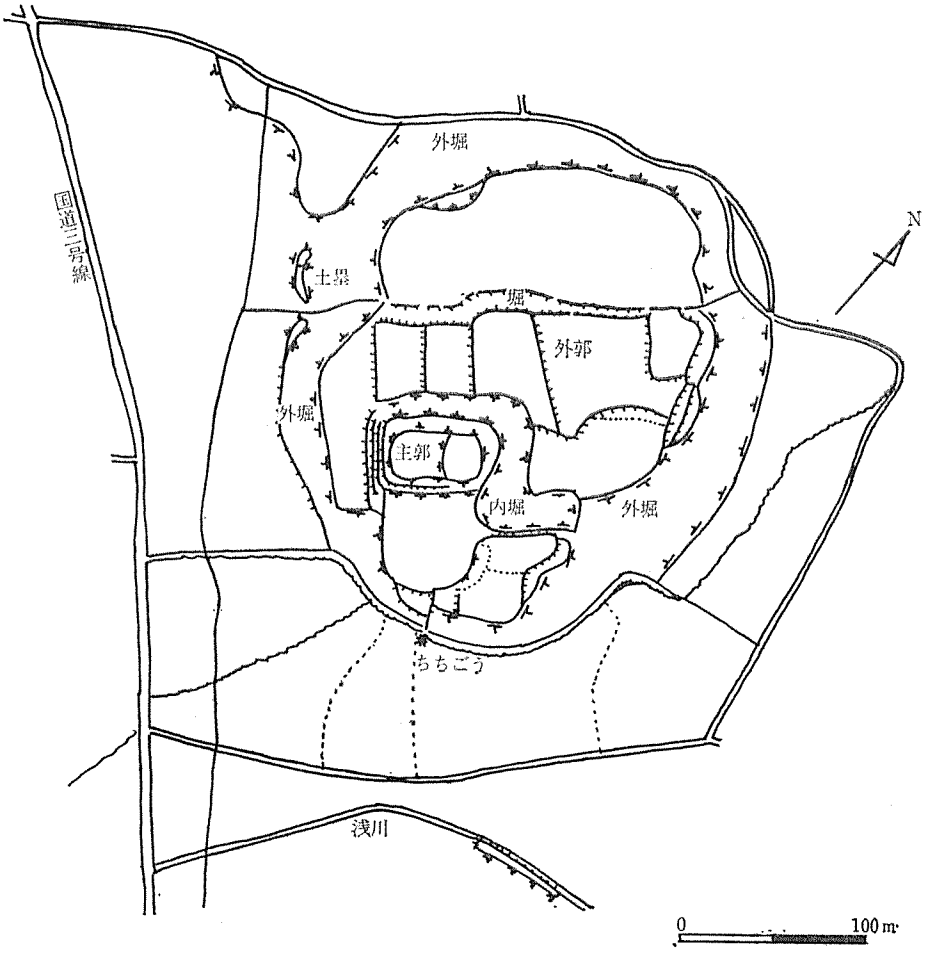
5　豊福城　主郭東側の内堀

※外郭

内堀を挟んで主郭の北側に、最大幅、東西190m、南北170m平場があり、ここが城の外郭にあたる。遺構としては、外郭北端から南へ70mの位置に東西へ走る堀跡が観察される。長さ60m、幅2m、深さ0.8～0.9mである。更に、外郭斜面には、東側に2ケ所、北西側に削除による小平場が設けられている。

※内堀

単なる素堀り的なものでなく、近世城郭に見られるような、形の整った立派なものである。主郭を三方から取り囲み、東側で外側で外堀と連なる。西側はミカン畑で消滅して



豊　福　城
下益城郡松橋町豊福下城・上城

第11図　縄　張　図

いるが、北側は幅12m、東側は幅20mの堀底をもっている。

※外堀

舌状台地を切り離す際に掘った部分が、城の北側における外堀となり、この堀は東、西方向へ延長されているようである。西側部分には土塁も一部残っている。

※浅川

城の南側近くに東西に流れる浅川があり、自然の堀の働きをしていたものと思われる。川の沿岸には、雑林が繁る長さ50m程の土塁がある。

※井戸

大手口の近くに小川が流れており、その縁に「ちちごう」と呼ばれる古井戸があり、最近まで残っていたというが、今は井戸わくがわりの瓶がなくなり、その所在が不明確になっている。

3、集落の様子

下町の集落が城跡と接しているが豊福城そのものが常に名和氏と相良氏の攻防の中に存在して前線基地の役目を果していたようで集落と城の結びつきは薄いようである。下町の開発が進んだこともあって城跡関連遺構は観察できない。字名でわずかに構ノ内、雀町、折敷町などが残る程度である。

4、表採遺物

本丸がゲートボール場になったり、出丸の一部がミカン畑に開墾されたこともあって、かなりの量の遺物が出土して、今でも表採が可能である。遺物は土師質土器が主であるが中には青磁や中世雑器も摺鉢(すりばち)を始めとして数種類見うけられる。尚、大型の漁業用土錘も主郭から出土している。

表採遺物の量の多さは上益城郡益城町の赤井城と並ぶ。

5、その他

この城の主郭部分には石垣がめぐらしてあったというが明和3年（1766年）に三軒屋新地築提の折、その礎石として使用する為に取りはずした伝承がある。

3、考　　察

※田平城跡

城跡関連地名と思われる田平の三丸や、こうじ等の小名は、いずれも、軍事学でいうところの城跡より、かなり離れた距離にある。田平城は宇土半島北側中央部という交通要地にあたり、海城としての役目をはたしていたと推察されることを考え合せれば、海からの攻撃にそなえて、平常の生活の場は、城から遠ざけられていたのではなかろうか。

※矢崎城跡

郡浦の内の矢崎は今も城跡を中心として、中世的村落形態をよく残す。

現存する遺構から見ても大規模工事の跡がうかがわれる。

築城にあたっては、かなりの勢力が背後にあったように思える。郡浦が阿蘇氏四箇神領の一つであった事を思いうかべれば興味深いものがある。

城のおかれた位置からして、背後の郡浦を守り、八代海に、にらみをきかすべく、前線基地としての役割を果していたものと考えられる、城跡の範囲は、「山の城」・「三郎丸」の丘陵に拡大し、矢崎の集落も完全に城と直結したと推察され、矢崎城はいわゆる総構えの城の性格をもつと言えるのではなかろうか。松橋の豊福城とは海上交通によるつながりが考えられる。

※木原城跡

木原の字図には、城山・小城・水汲谷等の中世的村落形態を意味するものが残っている。

水の便や、表採遺物からも、ある程度、城山の頂で生活が営まれていたことがわかる。木原道と木原山の山越えの道の押えとして城は存在したのではなかろうか。

一般に木原山全体が城跡のような受けとり方をされる事があるが、城の範囲は、木原山の末端尾根についた字城山と小城にとどまり、城に付随する集落として内村や居屋敷が考えられる。

※阿高城跡

先述のように典型的な砦の一種であろうと思われる。

木原道から松橋にいたる交通の要所におかれ、関所の役目をはたしていたのではなかろうか。

※豊福城跡

薩摩街道（通称）の沿線と八代海に面するという極めて重要な交通の要地にあたり地域防衛の前線基地としての役割をはたしたようである。

現存する遺構や城の形態からすれば、かなり時代は下がり、戦国末期くらいまでおりてく

ると思われる。

隣接する竹崎城と考え合わせても、あらゆる意味から極めて学術的に価値の高い城であろう。

4、小　　結

熊本県内には中世に400を越える城が存在したといわれているが、その大部分は、いわゆる有力豪族の支城であったと思われる。

すなわち、逆の意味からは、数多い城も有力豪族の本城となれば、かなり数がしぼられてくるといえよう。

その意味からしても名和氏の本城と伝わる西岡台の宇土城は貴重である。

事実、今回、名和氏の支城ではないかと推察される五つの城について踏査した結果、城跡とされる山稜もしくは丘陵の平場に、宇土城跡のような千畳敷や三城等の字を残すものは一つもなく、規模の上からは、数段の差がある事が判明した。

しかるに、宇土城を中心として、周辺に前述の支城を配置した一円支配を考える時、各城はいずれも古道で直結し、いずれも、交通要所に位置する事が判明する。

もちろん五つの出城が宇土城にとって同時期に存在したとは言えないまでも、この事は重要な意味をもつものと思える。

名和氏の一円支配は、宇土城をぬきにしては考えられない。他の五つの支城の保存状態が良好なだけに是非とも宇土城の保存をはかりたいものである。

5、お わ り に

今回の調査にあたっては始終、宮本公一君（熊本工業大学生）の協力を得るとともに、井上正氏と下記の方々に御援助を賜わりました。感謝の意を表します。

田　平　城	村崎ミスエ
矢　崎　城	高藪　一郎、元田　寅蔵、浜口　俊夫
木　原　城	改原　保雄
阿　高　城	塚本　常子

主要参考文献

古城考・肥後国誌・宇土郡村誌・下益城郡村誌・下益城郡誌・城南町史・富合の里・松橋町誌・宇土郡誌・竹崎城（熊本県文化財調査報告第17集）　熊本の城（熊本日日新聞社）

文　献　調　査

井上　正

田　平　城　跡

網田は中世このかた郡浦社領郡浦庄のうちである。郡浦社領の四至「北限小松浦河流[①]」とあるは、網田字小松であって、郡浦社領は内陸部では長浜字笠瓜におよぶ[②]。古来網田八十町と伝えられている[③]。網田の田平城は古く網田城の称あり、別に網田田平城という。

正平十六年、宇土壱岐入道道光が郡浦を押領し、阿蘇惟澄に対し異議を申し、打渡を妨げた、というが、これは宇土道光が郡浦社領の網田に代官を差向け、網田城は橋頭堡として築城したものであろう、という説がある[④]。もしそうであれば、網田に城成の地があったように、同様郡浦にもあって然るべきであろうし、阿蘇文書、興國二年十月二十八日、阿蘇品惟定申状案、別紙に「あふたのしやうにして、度々のかつせんに忠をつくし、わかたう五郎三郎うち死仕候[⑤]」と見える網田城と別個の城と考えるのか、伺う必要がある。肥州城址旧知考によれば、文明年中、名和武顕の臣杵築越後を田平城代とした、というが、年代に疑問が残る。國郡一統志は下田刑部少輔と、また古城主記には下田刑部を城代としているが、ともに年紀を欠く。しかし郡浦社領に阿蘇家の臣が派遣さるることはあり得ることで、網田には阿蘇惟長墓の伝を有する墓碑も残っている。

天文十九年閏五月、網田は一応宇土領に帰した。八代日記によれば、「同二十三日、宇土ヨリ郡浦・アウ田知行候、是ハ矢部ヨリ彼両所宇土進せられ候よし申候」と見える。しかしながら、両地宇土領への移譲は必ずしも円満には行きかねた、と見へ、永禄七年十一月十三日、宇土より網田に兵を差向けてこれを攻め、宇土方十四人が討死した[⑥]。

天正八年十月十五日、島津修理大夫義久、兵を遣して矢崎城を伐ち、同月十六日、中村二太夫拠るところの網田城を攻めた。島津方市来備前守・長野民部少輔・上原内蔵助・黒木掃部兵衛尉・貴島源四郎・宮原与四郎この戦に討死、田平城も亦守城を全うすることが困難であったので、遂に和を求めて降り、島津方は同月二十九日隈本城に帰陣した。かくて同年、島津義久は網田・神崎三百町を名和顕孝に授けた[⑦]。島津家伝に網田を太田、神崎を加保につくる。名和顕孝全盛期の宇土領は網田・郡浦三百五十町を含め、宇土郡のすべてに及んでいたから[⑧]、加保はすなわち郡浦と見るべきであろう。従来、永禄のころ、名和顕孝の家臣加悦大和入道素心が田平城の城代となっており[⑨]、同所が固有の宇土領である、との理解から、天正七年、名和顕孝

が島津氏に服属した翌天正八年の田平城落城説は諸家の多く採るところでなかったが、同時にこれを疑問視する者もいないわけではなかった。三宮社記録によれば「網田・郡浦ハ自宇土薩摩勢ノ加勢ヲ以テ責取ラレタル由相伝、天正八庚辰年ト有」と見え、同年春夏の間、名和顕孝・城親賢から島津氏に北伐を要請していた事実があるから、天正八年[10]、田平城の落城によって網田が名実ともに名和氏の領地となり、田平城は宇土城の支城の性格を有するに至った、と見る方が順当である。

加悦氏は名和氏の族臣、その先、名和長年の弟加悦悪四郎泰長の子土佐守長安から出ている。加悦長安は豊福の城番を勤め、その子越前守泰行は津奈木の城番であった。永正十四年、名和氏の老中に加悦但馬守忠久、天文四年に同じく加悦右衛門尉顕久が見えるが、加悦大和入道素心はその同族である。同人は一に祖心につくり、道貫とも称した様である。加悦飛弾はその子である。

田平城は名和氏の改易とともに廃城となったものと思われ、以後歴史に現れていない。

註

① 肥後国司庁宣写「阿蘇文書」　2—3頁
② 肥後郡浦庄地検帳「阿蘇家文書」　220号
③ 「肥後国誌」　下、43頁
④ 杉本尚雄　「中世の神社と社領」　271頁
⑤ 北坂犁惟定本領安堵申状案「阿蘇家文書」　80号
⑥ 「八代日記」　永禄7・11・13
⑦ 「島津世録記」
⑧ 「三宮社記録」
⑨ 「村上名和家系略」
⑩ 「三宮社記録」

矢　崎　城　跡

矢崎城築城の年代は詳かでないが、郡浦社領郡浦庄と関係が深い、と思はれる。　郡浦三宮大明神社は三代実録に見える蒲智比咩神社のあとであろう、といはれている。郡浦における自然神を祀った所謂郡浦神にほかならない。

久安六年正月二十三日、肥後国司の庁宣によれば、三宮大明神社は御寄進の地に祭会を置かれたもので、早くも近隣土民等界を越えて乱入し、神事の妨をなす始末であった[①]。社伝によれば、三宮大明神社は天養元年の創建である、といふが、同社は僅々七年にしてこの試練に遭ひ、その対策として神事の妨害をなす者を排除し、これを不輸の地として認められんことを希

望した。すなわち、郡浦社は甲佐社との縁由をもって阿蘇社の末社に編入され、その社領も亦阿蘇社領の系列に入り、皇室に寄進、安楽寿院に施入され、のち預所に萬里小路大納言入道（藤原宣房）をあげ、郡浦社領は阿蘇家の権威のもとに保全の目的を果した、と思はれる。そして鎌倉末期においては郡浦庄は北條得宗領となっていた。[②]

元弘三年、北條氏滅亡し、同年十月二日、郡浦庄（泰家法師跡）は、本家領家の号を停めて阿蘇大宮司惟直に管理せしめたが、[③]延元三年十月、一色少輔入道の代官田井間三郎家政が郡浦城を占拠していたので、恵良小次郎惟澄は郡浦城を攻めてこれを陥れ、田井間三郎を討取った。[④]

ここに云ふ郡浦城は郡浦字城山（じょうやま）に構築されていたものであるが、これを廃し新たに矢崎城を興した時期について考察を加えたものは極めて少ない。新撰事蹟通考は、貞和二年十二月三日の詫磨文書を引き、阿蘇大宮司惟時郡浦に城郭を構へ、凶徒等を招寄せ楯籠る、とあるを見て、新城の築城と判断しているようであるが、十分ではない。

興国三年六月二十七日、郡浦社領を阿蘇惟時に安堵した[⑤]前後の混乱の中にあって、興国七年の頃、郡浦社領は他人競望の患あり、一再ならず他人におこなはれざることの保障を得ていたにも拘らず、正平十六年、宇土壱岐入道道光の代官が郡浦に城郭を構へ異議をとなへる事態となり、同年十月二十三日、征西大将軍宮は、重ねて菊池武光に対し、郡浦の城郭を破却し、下地を阿蘇惟澄に沙汰しつけるべき旨令旨が下された。[⑥]この処分の実行は疑はしく、文明十八年の頃、宇土為光知行する郡浦庄を阿蘇家に還付した形跡がある。[⑦]ここに云ふ城郭は一応新城である、と思はれるが、矢崎城であるか否かは明らかではない。

肥州城址旧知考によれば、文明年中、名和武顕の臣、東右衛門大夫が矢崎城の城代であったが、のち戦死した、という。この説は確実ではない。天文十九年閏五月二十三日、郡浦は網田とともに名和氏の有に帰したが、阿蘇家は依然郡浦の支配をつづけ、中村伯耆守惟冬を矢崎城代とした。天正七年、名和顕孝は城親賢とともに島津氏の鎮将を隈本城と迎え、天正八年四月十六日、名和顕孝は城親賢とともに阿蘇氏を撃たんとし、隈本鎮将の応援を求め、同年八月十二日、城親賢も亦書を伊集院忠棟に送り、島津氏の北伐を勧めた。島津世録記によれば、矢崎の城主中村一太夫阿蘇氏と通じ、宇土・熊本の通路を断つ、として、天正八年、島津義久の部将新納武蔵守忠元、鎌田尾張守政年を宇土に派遣し、佐多常陸守久政・河上三河守忠智を隈本より海路矢崎城下に至らしめ、矢崎城を力攻した。中村一太夫はすなわち中村惟冬であるが、同年十月十五日、この戦に死し、その妻は小長刀を振って切って出で、戦史に残る壮烈なる戦死を遂げ、その子左兵衛は擒となる。[⑧]天正十年、甲斐宗運、島津氏に降を請ひ、同年十一月二十二日、甲斐宗運使を島津氏に遣はして、網田・郡浦の還付を求めたが聞かれず、ここをもって郡浦社領は阿蘇家の支配を離脱し、名実ともに宇土領となり、矢崎城も亦宇土城の支城となった。三宮社記録によれば、この際、加悦飛弾の弟加悦三浦が矢崎城の城主となった、といふ。所領三百五十町。

矢崎城は名和氏の改易によって廃城となったものと思はれる。

註

① 肥後国司庁宣写 「阿蘇文書」2—3頁

② 杉本尚雄 「中世の神社と社領」

③ 後醍醐天皇綸旨 「阿蘇家文書」 6号

④ 恵良惟澄申状 「阿蘇家文書」 122号

⑤ 後村上天皇綸旨写 「阿蘇文書」 2—18頁

⑥ 征西大将軍宮令旨写 「阿蘇文書」 2—50頁

⑦ 沙弥洞然長状写 「相良家文書」 319号

⑧ 「古城考」

木　原　城　跡

木原城は源為朝の居城と伝へられている。仁平元年三月、源為朝は九州に下り、九州各地を押領し、自ら鎮西総追捕使鎮西八郎と称し、木原山に城を築きここに居る。安元二年三月六日、伊豆国大島において自害した。年三十八。源為朝は射術の妙を得、世に猨臂将軍と称する。木原山では今に至るも飛雁源為朝の弓勢を恐れ、列を乱す、よって木原山を雁回山と称する、というが、源為朝の肥後国内に居住することはすべて口碑の伝へるところであって、確実なることはもとより不明である。木原城跡の源為朝築城説や、兵粮を蓄積した岩穴などの諸説は、為朝伝説に附会せられたものではないか、と思はれる。さらに中原雑記の矢橋庄司宗親居城説に至っては採るに足りない。むしろ守富庄地頭に関係あり、とする見方が信がおける。史料には木原太郎顕実・木原次郎盛実・木原太郎実澄などの名が散見する。

文明年中、名和弾正大弼武顕は連年相良左衛門尉為続と争ひ、遂に八代より宇土に移り、宇土郡、守富庄および飽田郡のうちを領した。一説に宇土城には加悦飛弾をおらしめ、名和武顕は木原城に居城した、[①] とも伝へられるが、別説、文亀四年二月六日、名和伯耆守顕忠古麓城を相良長毎に致して木原城に移り、さらに宇土城に移った、[②] という。前説では名和武顕と相良為続の生存年代が一致しない上、名和武顕が非常の長命ということになる。名和武顕は後説名和顕忠の子孫であるから、前説は信じ難い。しかし名和氏は守富庄において七百五十町を領し、[③] 六殿大明神宮の祭事を助けたことが伝へられているが、木原城は鎮西八郎の名のみ高く、戦史に何等特記されたものはない。

木原城は間もなく廃城となったもの、と思はれるが、その時期は詳かではない。

註

① 「肥後地誌略」

② 沙弥洞然長状写 「相良家文書」 319号

③ 「三宮社記録」

阿　高　城　跡

阿高城、別名東阿高城ともいう。肥後国誌によれば、名和武顕の臣三谷刑部左衛門が阿高城に在城した、と云ふ。寺本直廉の村上名和家系略によれば、下って永禄のころ伯耆左兵衛尉顕孝が臣三谷刑部左衛門を阿高城代とした、といふ。名和領阿高五十五町があるから[①]、名和氏宇土城の支城阿高城の存在は一応信用してよい、と思ふ。

阿高城は多分享禄のころに築城されたものであろう。三谷氏は名和家の一族である。名和長年の弟三谷筑前守行氏の子安芸守義氏、義氏の子丹後守行長津奈木城番となる。永正のころ、名和氏の老者三谷美濃守顕倫[②]があった。三谷刑部左衛門はその同族である、と思はれる。

註

① 「三宮社記録」

② 名和氏老中契状 「相良家文書」 298号

豊　福　城　跡

豊福は八代郡豊福郷の地である。上古官道の駅戸豊向も読みは「トヨフク」であって[①]、古来交通の要衝にあった。豊福城築城の時期は明らかではないが、高野山文書に八代北郷豊福保が見え、一応高野山領と考えられ、建武元年、名和義高八代荘地頭職に補するの事情から、豊福城は南北朝期ころから注目されたと思われるが、その後修築されたとすれば、中世後期においてであろう。構ノ内は古き庄官の居館である疑がある。

正平十三年、名和弾正大弼顕興本国の難を避け、肥後国に移住して豊福城に入る[②]。正平十六年、名和顕興は代官を遣はし、甲佐社領小河を押領して要害を構へ、阿蘇惟澄に異議を申し、打渡に及ばず[③]、名和顕興は以後菊池氏と行動を共にし、守山御所守護の任に当り、その一族をして八代・芦北・益城の諸城を守らしめた。名和顕興はのち麓の城に移り、養子弾正少弼泰興も亦麓の城にあり、一族加悦土佐守長安を豊福の城番とした。その後、蜂須賀尾張守義顕・本郷内蔵助相次いで城番となる、といふ。豊福庄二百四十町。

文正元年、菊池肥後守為邦の二男民部允武邦、豊福城に拠り菊池為邦に叛したが、菊池重朝に攻め亡された[④]。

文明十六年、名和顕忠、芦北・八代の諸城を棄てて去る[⑤]。豊福城も亦相良氏に帰し、その臣東播磨を城番とした。明応七年、菊池能運豊福城を陥れ、明応八年三月二十三日、名和顕忠八代を復し、豊福城等を併せ領し、相良氏は球磨に退いた[⑥]。文亀四年二月六日、名和顕忠麓の城を相良長毎に致して去り、木原城に移り、のち宇土城に入る、といふ。この際豊福城も亦相良氏に帰した[⑦]。

永正八年四月二十四日、名和顕忠豊福城を攻め、久具川において相良方七十余人を討取っ

た。[8] 以後数十年名和・相良両家の間に豊福城争奪戦がつづいた。永正十三年九月、名和顕忠、小野守山を侵したので、相良長毎これを奪回し、再三力を尽して豊福城を撃ち、遂に豊福城を取る。[9] 大永七年、相良刑部大輔豊福城を棄てて去ったので、名和武顕の臣皆吉伊豆守を豊福城番とした。[10]

天文四年三月十六日、阿蘇の兵宇土の兵と豊福大野に戦い、宇土の兵敗れ、皆吉伊豆守豊福を棄てて走り、相良義滋これに兵をを入れた。[11] 天文十九年、皆吉武真宇土城に入ったが、志ならず、去って豊福城に入り、また去って八代に至る。相良晴広は豊福城を取り、守兵を置いた。[12]

弘治二年六月二十七日、阿蘇・相良・宇土の老臣娑婆峰において会見し、豊福城の帰属を決定した。[13] 永禄七年豊福城主名和行直兵を起して宇土城に入る。[14] 永禄八年六月十三日、相良義陽兵を遣はして豊福城を取る。[15] 以後豊福城は相良氏の属城となり、太閤征西以後、豊福城の名史上に現るることなく、廃城となったものと思はれる。

註

① 九条本 「延喜式」

② 菊池武朝申状写 「志岐文書」 16号

③ 甲佐宮牒写「藤崎宮文書」 15号

④ 「菊池伝記」

⑤⑥沙弥洞然長状写 「相良家文書」 319号

⑦ 「蜂須賀旧記」◇沙彌洞然長状写「相良家文書」 319号

⑧⑨沙弥洞然長状写「相良家文書」 319号

⑩ 「八代日記」 大永7・4・24

⑪ 「八代日記」 天文4・3・16、 天文4・3・24

⑫ 「八代日記」 天文19・6・18、 天文19・6・23、 天文19・6・25、 天文19・7・8、 天文19・8・11

⑬ 「八代日記」 弘治2・6・27

⑭ 「八代日記」 永禄7・4・8、 永禄7・5・8、 永禄7・5・9

⑮ 「八代日記」 永禄8・6・13

宇土城は中世の後半、宇土氏についで名和氏の居城となり、戦国一方の大名として勢力を振ひ、宇土領内に支城と目さるるもの、田平城・矢崎城・木原城・阿高城および豊福城を擁し、天正七年以来、飽田郡川尻城をも管した。名和顕孝は、川尻二百五十町の鎮として、加悦飛弾守をして川尻城におらしめた。川尻城跡は熊本市川尻町外城にあり、現在鹿児島本線が城跡を通過している。中世鎌倉期の築城といはれているが、戦國期に河尻重兼に至るまで河尻庄の地頭河尻氏の居城となっていた。名和氏の移封の後、加藤領となり、近世御茶屋・河尻町奉行屋敷・河尻御蔵がおかれた。川尻城は河尻氏が同地の海運を重視し、緑川および、水濠を要害と

して城を築いている点を特長とし、平城であるが、細川忠利も亦川尻城に着目して移城を計画していたことが肥後宇土軍記に誌されている。

宇土城は、城（シヤウ）に所在地宇土を冠記したものであるが、馬場村もと石瀬村の枝郷、のち段原村の枝郷であって、段原村は宇土と異名同体であるから、中世にあっては宇土の城と云はれていた事情が窺知できる。

肥後国誌に云「宇土城迹ヨリ西ニ当ル上ノ野」すなわち近世の西岡に名和氏の館阯があったことは夙に伝承の存するところであり、肥後宇土軍記によるも、宇土城の範囲が広大であって、本城の実を有することは史家のひとしく認めるところである。

肥後宇土軍記に云ふ「西岳」と称する岡陵、いま西岡と書く。西岡は近世宇土城跡の総名であったが、明治初年地租改正のさい細分され、この岡陵の一部に西岡は依然神馬の字として残っている。

宇土城は昭和十年七月、陸軍築城部本部本邦築城史編纂委員石割平造氏が実地調査し、宇土城の主郭はもとより三城・西平間の堀切の存在に至るまで周知の事実であった。戦前熊本県調査史蹟であったばかりでなく、昭和四十七年十二月二十三日、宇土市も亦、宇土城（西岡）を挙げて宇土市文化財（史蹟）に指定したのである。

這般の宇土城発掘調査は、同地が宇土城跡であるが故に行なはれたものである。さればこれら先人の知見を踏まえ、調査の方針を煉り、これに基づき発掘調査を進めたのである。果然、調査の過程において、空堀・柱穴など中世城郭を示す土木遺構をはじめ、夥しい遺物の包蔵の事実を発見したのである。今後も学者が宇土城をより広い角度から研究されることを望んで止まない。